
王子様と結婚してもいいですか？

山口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子様と結婚してもいいですか？

【Nコード】

N2166T

【作者名】

山口

【あらすじ】

イケメンの悪魔を呼び出すのに成功しました。彼の力を借りて、王子様をゲットしようと思います。

もてない魔女

私の名前ははスカーレット・フリーセア。十六歳で、一応魔法使い。

なんで「一応」なんて言うかって？

うん、へなちょこだから。魔法使いのくせにたいした魔法が使えない。

できる事って言えば……作った料理をちよつとだけおいしくするとか、洗濯物をちよつとだけ早く乾かすとかね。

よーするに、超使えない魔女なんです！

ちなみに今、村はずれのほったて小屋に住んでる。ホコリっぽいしカビ臭いし、もう最悪。毎日お掃除してるんだけどね。

もーいい加減、こんな生活から抜け出したいです！

ところで、私には夢がある。イケメンの王子様と結婚して、玉の輿に乗る事だ。

でも現実は厳しい。村はずれのほったて小屋に住んでる野暮ったい魔女なんかに、どこの王子様が振り向いてくれるって言うんだらう。

まあそんな夢は置いといて、今日も魔法の修業をしよう。

使う教科書は「魔法大全」。なんか分厚くて、ちっちゃい文字がいっぱい書いてある。

本を読むのが苦手な私にとって、ほとんど天敵だ。でも修業のためだからしかたない。

さて、今日はどの魔法にしようかな……って、あれ？

目次に見慣れない文字があるよ。「悪魔を呼び出す魔法」だって。うわ、ヤバすぎ。

でもちよつと興味あるなあ。読んでみよう。なになに……「イケメンの悪魔を呼び出す魔法です。彼と契約を交わせば、どんな願いもかなえてくれます」

うわあああ、もうやるっきゃないし！

イケメン悪魔

どんな願いもかなえてくれるイケメン悪魔。こりゃ絶対呼ばないと損でしょ！

悪魔っていうのがちょっとやだけど、細かい部分には目をつぶる事にしとこつと。

……細かいのかな？

まあいっか。えーと、まず地面に魔法陣を描きます。次にローソクを立てて火をつけます。

そんでもって呪文を唱えればオッケー！

「ぷにぷに！ もふもふ！」

変すぎる。動物でも呼ぶわけ？

あれ、なんか煙が出てるし。ヤバっ、火事だよ火事。水、水ー！

……と思ったら、煙が消えた。な、なんかいる！

「にゃあ！」

猫だよ。どー見ても単なる黒猫。イケメンとか大嘘じゃん！

「ボクはイケメンの悪魔だよ！」

「きゃー！ 猫がしゃべった！」

「呼んでくれてありがとう！」

「って嘘つき！ どこがイケメンなわけ？」

「猫の世界じゃ超イケメンだよ！」

そー来たか。私は人間だし、猫の美的感覚なんか知らないっての。

「あのね、もう帰って」

「どーぶつは嫌いかにゃ？」

「普通の動物なら好きだよ。でもしゃべる猫とかありえないし！」

「じゃあ人間に化ければいいかにゃ？」

「そ、そーいう問題じゃ……」

「にゃにゃにゃ、にゃー！」

うわ、また煙出てるし。やめてよもう！

って、なんか男の人が立ってるよ。

すぐく背が高くてすらっとしてる。銀髪で肌が白くて瞳が碧くて、目が切れ長で鼻が高くて……。

うわ、めっちゃイケメン。ヤバイ。超ヤバイ。

「僕の名前はアラン。君は？」

はわわ、なんかすごくさわやかな声。この人って本当に悪魔？

「ス、スカレットです！ 十六歳で彼氏いなくて、えーと……」

「赤くなっちゃってかわいいね」

もふもふ黒猫

たぶん、私の目はハートマークになってる。自分じゃ見えないけど、きつとそうだ。

「あ、あのあの……」

「そんなに緊張しなくていいよ」

アランが近づいてきて私の手を握ってる。もうどーしていいかわからない。

「スカーレット、僕と契約を交わしてくれるかな？」

「け、契約でもなんでもします！」

「そうか、いい子だ」

彼が私のおでこにそっとキスをした。それからじっと見つめてくる。

わあ、なんて綺麗な顔……女装したら、誰も男だってわからないよ。

胸がどきどきして張り裂けそうです！

「あの、契約って何をすれば？」

「簡単さ、この紙にサインしてくれればいいんだ」

いつの間にか、アランの手に一枚の紙が握られてる。ご丁寧にペンまでついてます。

「さあ、サインしてくれ」

「は、はい……喜んで」

紙を受け取ろうとしたら、また煙が出た。ちよつと、なんなの？

「にやにやにやにやー！」

……猫に戻ってるし。

「ちよつと、人間になってよ！」

「めんぼくない、魔法が切れたんだにやー」

「えー、やだ。アンコール！」

「そんな無理だにやー」

「なんで！ どーして！」

「ボクの魔力は最近イマイチなんだにやー」

「え、じゃあ前はすごかったわけ？」

「もちろんだにやー、えっへん！」

いばる黒猫

「へー、すごいってどのくらい？」

「具体的に言うのは難しいけど、『厄災をもたらす者』として有名だったんだにゃー」

「ヤクサイって何？」

「……。まあ要するに、世の中をすごく悪い方へ持っていく悪魔だったんだにゃー」

アランはそんな事を言いながら、前足で自分の顔をこすってる。黙ってるとただの黒猫にしか見えない。

「ねえねえ、なんで今はダメなの？」

「世の中が平和になったからだにゃー」

「じゃあ戦争とか起こればいいわけ？」

「そのとおり！」

「戦争が起これると、なんであなたの魔力が強くなるの？」

「そいつは言えにゃい」

なんだか気になるなあ。よし、吐かせよう。アランののどを指でこちょこちょしてみる。

「にゃ、にゃにゃにゃ？」

「ほーらほーら、気持ちいいでしょ。白状しちゃいなよ」

「にゃ、にゃにゃー！ き、気持ちいいー！」

彼は目を細めて、のどをゴロゴロ鳴らしてる。そろそろ白状すると見たね。

「ほら、言っちゃいなよ。ね？」

「ふにゃー！」

「これでもかー！」

「ふにゃにゃー！」

うーん、しぶとい。もつとくすぐってみよう。

「し、仕方ない。教えるにゃー」

「わーい！」

「ボクは、人間の負の感情を吸収して生きる悪魔なんだにゃー」

「負の感情？」

「そ。嫉妬とか憎しみとかね！」

やっぱり悪魔

ふーん。変わってるね、この子。でもなんか、そういう話を聞くとやっぱり悪魔なんだなって気がする。

「ところでスカーレット、契約してくれにゃいか？」

「するとどうなるわけ？」

「そりゃあもう、人生バラ色に変わっちゃうにゃ」

うーん、怪しい。怪しすぎる。

「悪魔と契約なんかしたら、寿命を削られたりするんじゃない？」

「あー、そういう悪魔もいるにゃあ」

「あなたは違うの？」

「うん。寿命をもらう意味ないし。まあ、この契約書を見てほしいにゃ」

アランが白い紙を一枚突き出した。それにはこんな事が書かれている。

「悪魔アランは、スカーレット・フリーセアに協力する」

「スカーレット・フリーセアはこれを承諾する」

何これ、私は承諾するだけ？

「ねえ、こんな契約してあなたになんのメリットがあるの？」

「ないにゃ」

「メリットがないのに、なんで協力するの？」

「さあ」

あ、怪しい。絶対怪しいよ。なんせ悪魔だし。

「さては信用してないにゃ？」

「当たり前でしょ。なんかのサギにしか見えないよ」

するとアランは、ふっとため息をついた。猫のため息なんか初めて見たよ。

「ボクは今まで悪い事ばかりしてきたから、その罪滅ぼしがないんだにゃあ」

反省する黒猫

アランが遠い目をしながらしみじみと言う。

「本当に悪い事ばかりしてたからにゃー」

「へー、例えば？」

「大国と大国を戦争させたり、受刑者たちを勝手に解放したり、集まった税金を丸ごと盗んだり」

うわ、最悪。やっぱり悪魔ってだけの事はあるよ。

「ま、そんなわけで契約してくれるかにゃ？」

う、うーん……どうしよう。すごく危険な気がする。

「迷ってるのかにゃ？　じゃあお試し期間を作るのはどう？」

「何それ、気に入らなかったらやめられるわけ？」

「その通り」

「それならいいよ」

「オーケー。じゃあ何か願いを言ってほしいにゃ」

「今のあなたの魔力はたいした事ないんでしょ？　願いをかなえる事なんてできるの？」

「ある程度は可能だにゃ」

ある程度ってどの程度なのかな。

「じゃあさ、私を美人にしてよ」

これはもう、切実な願いだね。外見に関しては本当に自信がないし。

「りょーかい。その鏡の前に立ってほしいにゃ」

私は鏡の前に立った。相変わらず見た目はさっぱりだ。顔は地味だし、幼児体型だし。

あ、着てるのは赤いワンピース。あと、赤いリボンを頭につけてる。

「じゃあ、いくにゃー」

「いえっさー！」

「にゃんごろにゃんごろ、にゃんごろりん！」

いきなり変身

うわ、なんか体が白い光に包まれてるし。

「できたにゃー」

へー、どれどれ……って、別人みたいだよ！

髪はウェーブのかかった金色のロング、真っ白な肌に紫色の瞳。ぱっちりした目にローズピンクの唇、長いまつ毛にすっきりした輪郭……

あと、スタイルもめっちゃいい。胸は谷間ができるほど大きいし、腰はきゅっとくびれてる。お尻の形も整ってるし足も長い。

「気に入ったかにゃ？」

「もうサイコーだよ！ バッチリ！」

「それはよかったにゃあ」

「わーい、わーい！」

すごい、すごすぎる。こんな力があるなら契約してもいいかな。

……って、胸がしぼんでるし！

「ちょっと、猫！」

「にゃあ？」

「元に戻ってるじゃない！ あ、ほら顔も！ どういう事？」

「お試し期間にゃから……」

「だからって短すぎるでしょ！」

「契約してくれればいい話だにゃー」

うーん、やっぱり契約するしかないのかな。

あれ、ドアを叩く音がするよ。誰か来たみたい。

「スカーレット、いるかい？」

あ、近所に住んでるロベルトだ。

「はい、今開けるから待っててねー」

ドアを開けると、彼が立っていた。野菜がいっぱい入ったカゴを持ってる。

「今朝収穫したんだ。よかったら食べてくれよ！」

「あ、ありがとう」

ロベルトは私と同じ十六歳で、農業で生計を立ててる。両親は既に亡くなっていて、二歳下の妹と二人暮らしだ。

決して美男子ではないけれど、よく日に焼けたたくましい体をしてる。あと、いつも元気で笑顔を絶やさない。

「あれ、その猫は？」

さわやか少年

え、どうしよう。まさか悪魔だなんて言えないよ。しかたない、なんとかごまかそう。

「えっと、さっき拾った野良猫」

「へー、飼う気なの？」

「うん、可愛いそうだし」

「ふーん、優しいんだなあ」

ロベルトはにこにこ笑ってる。ごめんね、嘘ついちゃって。

「ところでスカーレット、ロゼッタの街へ遊びに行かないか？」

「え、今から？」

「そうだよ」

「ごめん、無理。また今度にして」

「そっか、じゃあ次の機会にね」

あーあ、肩を落としてるよ。せつかく誘ってくれたのに、悪い事しちゃったなあ。

でも、今はそれどころじゃないんだよね。人生がバラ色になるか

どうかの瀬戸際なんだから。

「そうそう、スカーレット。こないだ妹が風邪ひいて寝込んだとき、魔法で熱を下げてくれたよね。本当に助かったよ。ありがとう」

「ううん、気にしないで」

「いつか埋め合わせするからさ。じゃあまたね」

彼はにこにこしながら帰っていった。しょっちゅう訪ねてきてくれるのは嬉しいんだけど、単なる村人にたいして興味ないんだよね。

そうそう、猫との契約をなんとかしないと。

「どうするか決めたかにゃ？」

「うん。私、あなたと契約するよ。よろしくね」

「じゃあサインをお願いするにゃ」

アランが白い紙とペンを差し出した。うーん、勇気いるなあ。相手は悪魔だもんね。

でも、バラ色の人生のためだよ。やるしかないでしょ。

ついに契約

私は、アランが差し出した紙にサインをした。でもなんの変化もない。

「ちょっと、猫。どういう事？」

「いや、何度も無理するとボクの魔力が尽きてしまうにや」

「そこまで力が弱まってるの？ 契約した意味ないじゃない！」

「まあまあ。あわてにゃい、あわてにゃい」

アランはそんな事を言いながら顔をこすってる。役に立つのかな、この猫。

「今は無力にゃけど、いずれなんでもできるようになるにや。条件さえそろえばね」

「条件って？」

「教えにゃい」

……この子をいじめていいかな？

彼の頭を左右のげんこつで挟んで、ぐりぐりしてみる。

「にゃー！ 動物虐待！」

「嫌なら早く教えてよ。ね？」

「にゃんちゅー凶暴な女にゃ！ この悪魔！」

「悪魔に言われたくないし」

「わかった、教えるにゃ。ボクは、人間が発する負の感情を吸収するごとにパワーアップするんだにゃ。それが一定の量になると……」

「なんでもできるようになるわけね」

「その通りだにゃ」

ふーん、なるほど。じゃあ、負の感情とやらを集めればいいわけだね。

「ところで、おまいさんの望みはなんにゃ？」

「んとねー、王子様と結婚する事！」

「なんて身のほど知らずな女だにゃ」

「うるさい。いいから手を貸してよ」

「具体的にどーすればいいんだにゃ？」

「今、この国の第二王子が結婚相手を探してるんだよ。彼と出会う機会を作ってくれない？」

城下町へGO！

「えーと、その王子様はどこにいるにゃ？」

「この国の首都、ロゼッタにいるよ」

「ふーん。どんな人なんだにゃ？」

「実際見た事ないけど、超イケメンらしいね」

「じゃあ、とりあえずそこに行ってみるかにゃ」

「うん」

私はアランと一緒に家を出た。ロゼッタへ行くには馬車に乗る手もあるけど、お金がかかるから歩いていく事にしよう。

と思ったら、猫が後ろで騒いでる。

「ちょっと待つにゃ！ まさか歩いていくのかにゃ？」

「そうだけど？」

「魔女なんだからハウキでバビューンと飛ぶとか……」

「無理無理、できない」

「うわ、使えない魔女！」

「うっさい、あなたに言われたくないよ！」

うるさくてしかたがないから、カゴに入れて持っていく事にした。
猫は上機嫌だ。

「快適快適」

「もう、か弱い乙女に重労働させないでよね」

「猫一匹運ぶのが重労働とか、どこのお嬢様かにゃ？ ビンボーな
村人のくせに」

……捨てていいかな、これ？

「あー、いい天気だにゃあ。気持ちいいにゃー」

確かに、雲一つない晴天だ。ときどき吹いてくる優しい風が肌に心地いい。

「それにしてもド田舎だにゃー、畑とほったて小屋しかないにゃ」

「悪かったわね、へんぴな村で」

「こんなのどかな村は、ボクには住みづらいにゃ」

「あっそ」

私はじゃり道を踏みしめながらロゼッタへ向かった。早く王子様に会いたいなあ。

ロゼッタの街

猫を持ってしばらく歩くと、ロゼッタの街に着いた。この国の首都だけあってたくさんの人が歩いている。

そのとき、アレンがカゴの中から叫んだ。

「そうそう、こうでなくちゃいけないにゃー」

「ちょっと、静かにしてよ。目立つでしょ」

「嫌なのかにゃ？」

「うん、お願いだから黙ってて」

別に目立つのは嫌いじゃないけど、こんな事で目立つのはかんべんしてほしい。

ロゼッタの街は、地面が石畳だ。建物はオレンジ色の三角屋根と白い壁、茶色の格子窓で統一されている。

あと、水の都と呼ばれてる。街の中央を大きな川が流れ、その支流が四方八方に分岐しているからだ。その水はともきれいで、街の住民は飲料水として使ってる。

目抜き通りを歩いてると、たくさんの人とすれ違った。普通の服を着た一般人、鎖かたびらを着込んだ兵士、ローブをまとった魔法使いなど様々だ。

もつとも、魔法使いがローブを着ているとは限らない。普段着で歩いている住民の中にも、魔法を使う人はたくさんいる。

男性は自分を強くするために魔法を使う事が多いけど、女性は自分をきれいにするために使う事が多い。どんな化粧をするより効果があるからだ。そのため、高位の魔法使いは大体が美人だったりする。

妖艶な美女

まあそんなわけで、街を歩いてる女の人には結構美人が多い。私も魔法を使ってきれいになりたいけど、魔力が足りなくて無理。悲しすぎ。

カゴの中から猫が声をかけてくる。

「ところでスカーレット、王子は城の中にいるのかにゃ？」

「たぶんね」

「で、平民は城に入れるのかにゃ？」

「ううん」

「じゃあ、潜入するしかないのかにゃ？」

「うん……まあ、あなたが王子様を外に出してくれてもいいけど」

「無茶言ってんじゃないにゃー！」

「何言ってるの、それをどーにかするのがあなたの役目でしょ！」

通りの真ん中で言い争っていると、誰かとぶつかった。ヤバっ、謝らないと。

「い、ごめんなさい」

相手は二十歳くらいの女の人だった。中肉中背、ストレートロングの金髪、真っ白な肌。切れ長の目にすっきりした輪郭、ほっそりした体にすらりと長い手足をしてる。

着ているのは胸元を大きく露出したノースリーブと、極端に短いスカート。色はどっちも黒だ。靴は銀色のハイヒール。

あと、すごく印象的な事が一つ。この人の瞳は赤くて透き通ってる。なんだか宝石みたい。

彼女は私に視線を向け、眉間にしわを寄せながら言った。

「何を通りの真ん中で突っ立ってるわけ？ 邪魔なんですけど！」

うわ、なんなのこの人。めっちゃめっちゃ感じ悪いよ。

「す、すみません……気を付けます」

「マジふざけんな、このキモブス！」

あ、ありえない……ヤバイよ絶対。さわっちゃいけない人にさわっちゃった。どうしよう。

悪魔ガール

女の人が目を吊り上げているのを見て、私は震え上がってしまった。怖い。めっちゃめっちゃ怖い。

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

ぺこぺこ頭を下げてるうちに、猫がカゴから跳び出した。彼は石畳の地面に降り立ち、女の人に向かって静かに歩いていく。

「ちょっと、アラン！ 何するつもり？」

猫は答えず、女の人をじっと見ている。そのうち、彼女の切れ長の目がすっと細くなった。

「なんなの、この猫。私に何か文句でもあるわけ？」

「別に文句はないにゃ。ただ、おまいさん……普通の人間じゃないにゃ？」

彼女は目を見開いた。その顔から血の気が引いている。

「あなた何者？」

「ボクは悪魔アラン。おまいさんは？」

「ふーん、なるほどね。私はアンジェリカ、れっきとした人間だよ」

「スカーレットの不注意についてはおわびするにゃ。どうかかんべ

んしてほしいにゃ」

彼女は目を細めて猫を見つめた後、おもむろに言った。

「悪魔に頭を下げられちゃしょうがないね。ゆるしてあげるよ」

彼女は背中を向け、すたすたと去っていく。私は大きくため息をつき、その場に座り込んだ。

「ありがと、アラン」

「危ないところだったにゃ。あそこまで危険な女はそうはいないにゃ」

「だよね、あの性格……」

「性格じゃにゃいよ」

「え?」

「あの女、悪魔を自分の中に取り込んでるにゃ。この国にいるどんな悪魔よりも、どんな魔法使いよりも危険な存在にゃ」

悪魔ガール2

私はぞっとした。悪魔を自分の中に取り込むなんて怖すぎる。

「そんな事、本当にできるの？」

「やり方次第だにゃ。たぶんアンジェリカは呼び出した悪魔を魔法で拘束して、さらに吸い取ったんだにゃ」

「その悪魔って生きてるの？」

「たぶん、彼女の中で生きてるにゃ。魔力を与えるだけの存在として」

「なんかかわいそう。出してあげる事はできないの？」

「あの女が魔力を失えば出られると思うにゃ」

私はその悪魔に心底同情した。アンジェリカが魔力を失わなければ外に出られないというのに、自分の魔力を提供し続けなければならぬなんてあんまりだ。

「あの女の人、めっちゃめっちゃひどいね」

「うん。あんなタチの悪い人間とは、関わらない方がいいと思うにゃ」

「でも、なんでそこまでするんだろう？」

「美人になるために決まってるにゃ」

「えー。いくら美人になりたくても、私はやだな」

「安心したにゃ、同じ事をされたらたまらないにゃ」

私は苦笑した。やりたいとも思わないし、やろうとしてもできないだろう。へっぽこ魔法使いだし。

「まあ、そんな事どーでもいいよ。王子様に会いたいんだけど」

「会ってどうするにゃ？」

「どーするって、そんなの……」

「仮に会えたとしても、素通りされて終わりにゃよ」

魔香ショップ

そ、そりゃそうだよ。顔もスタイルも平凡で単なる平民の私が、王子様に会ったところでどーにもならないよ。

「アラン、もう一度私を美人にして！」

「今は魔力が足りなくて無理にゃ」

……本当に使えない猫だね。さっき助けてくれたのには感謝するけど。

「どうしょ。魔香でも買いに行こうかな」

「マコウ？」

「あれ、知らないの？ 魔力が宿った香水だよ」

「その香りで王子を惑わせるのかにゃ？」

「うん」

「持ってて損はなさそうだにゃー」

「まあね」

私は猫をカゴにほうり込み、魔香ショップに行ってみた。店の前に止まり木があり、紫色のオウムが止まって話しかけてくる。

「いらっしやいませー！ あ、スカーレット！」

「こんにちは、バルバラさん。猫も一緒に入っているのですか？」

「どーぞどーぞ」

アランが驚いて話しかけてくる。

「なんなんにゃ、この鳥は？　なんでしゃべってるんだにゃ？」

「ここのオーナーがバルバラさんっていう魔法使いで、オウムはその使い魔なんだよ。彼女は店の中にいるけど、この鳥を通して私と話をしてるわけ」

「なんだ、そんなすごい魔法使いと知り合いなのかにゃ。だったら、その人の魔法で美人にしてみらえぼ？」

「無理無理、絶対断られるよ」

「ダメ元で頼んでみたらどうかにゃ？」

「うーん……ダメだと思うけどね」

魔香ショップ2

私は猫をカゴに入れて店内へ入った。

外側は他の建物と同じようにオレンジ色の三角屋根、白い壁、茶色の格子窓だ。

内部は天井も壁も真っ黒で、黒い棚がずらりと並んでる。でも床だけは紫色。

その棚に陳列されてる香水が、例の魔香。皆、透明か半透明のガラス瓶に入ってる。

値段は一瓶三千から五千ルピーが相場だけど、中には百万ルピーするものもある。パン一つが百ルピーくらいだから、百万というのはとんでもない額だ。

やがて、奥にあるカウンターの中から女の人が出てきた。バルバラさんだ。

歳は二十二。一つに束ねた黒い長髪に黒い瞳、小麦色の肌にぱっちりした目、二重まぶた。小顔で小柄、やせ型。でも胸はしっかりあるのがうらやましい。

着てるのは紫色のチュニック、はいてるのは厚底のブーツ。あと、金色のイヤリングをつけてる。

彼女は私を見ると、満面に笑みを浮かべた。

「スカーレット、久しぶり！」

「こんにちは、バルバラさん」

「新商品が入荷したから見てってよ。これなんかどう？」

彼女が差し出したのは、リンゴの形をした赤い小瓶だ。

「どんな香りがするんですか？」

「使ってみればわかるよ、どーぞ」

自分の手に噴きかけてかいでみると、果物みたいな香りがした。
悪くない。

「すごくいい匂いですね」

「フルーティーローズっていいってね、若い女の子に大人気なんだよ。
値段が安い割に効果は抜群」

「へー、いくらなんですか？」

「千ルピー」

魔香ショップ3

せ、千ルピー？

安っ。本当に効果あるのかな？

ちなみに魔香の「効果」っていうのは香りの事じゃない。男の子をコロっといかせる事だ。

基本的に魔香は、女性にとっては単なる香水だ。でも男性にとっては媚薬として作用する。

強力な物になると、ちょっと匂いがかげただけで男性は悶絶してしまいうらしい。使った事ないから、本当かどうか知らないけど。

「千ルピーは確かに安いけど、それだけに効果が心配です」

「そう？ まあ確かに三千とか四千するのに比べたらアレだけど、値段の割にはかなり……」

「もっと強力なのがほしいです」

バルバラさんは目をぱちぱちさせてる。

「あんまり魔香に頼りすぎるのはどうかと思うよ。あくまでも補助的な物として……」

「一番強力なのはどれですか？」

彼女は大きなため息をついた。

「この店で一番強いのはクイーンズ・ラブっていう物で、三百万ルピーするんだけどさ。あまりにも危険なんで、そろそろ売るのがめようかと……」

「どのくらいの効果があるんですか？」

バルバラさんは黙り込んだ。どうやら言いたくないらしい。

「教えてください！」

「……例えば、あなたが自分に噴きかけて男の子に抱き着くとするでしょ？」

「はい」

「もう、その子はイチコロ。あなた以外の女性が全く目に入らなくなる」

魔香ショップ4

す、すごい。そんな香水があれば王子様もイチコロだよ。

「でもね、スカーレット。売ってる私が言うのもなんだけど、あまり高いのは使わない方がいいよ」

「え、なんでですか？」

「魔香の力で手に入れた愛なんて、真っ赤な偽物だから。効果が切れたときに二人の愛も終わるよ」

そ、そうですか。だよ、相手の気持ちとか完全無視だし。

「とか言いながら、さっき来たお客さんに一つ売っちゃったんだけどね。すごい押しが強くて断れなくなってるさ」

「クイーンズ・ラブをですか？　どんな人？」

「うん、赤い瞳をした二十歳くらいの子。ものすごい美人」

げ、アンジェリカじゃん。やだなあ。

まあいいや、あんな危険人物の事はソッコー忘れよう。

「じゃあバルバラさん、魔法で自分を美人にするのもダメですか？」

「私はよくないと思うな。お化粧するくらいはいいけど、魔法だと顔とか体そのものを変えちゃうじゃない？　そうなるともう別人だ」

よ。『本当のあなたはどこに行ったの？』って感じ」

うーん、やっぱりダメか。意外と頭が堅いんだよね、この人。

「だいたい、スカーレットは結構かわいいじゃないの。魔法とか魔香の力に頼らなくても全然……」

「ダメなんです。狙ってるのが大物だから」

「え、誰？」

「この国の第二王子、ガブリエル様」

ガブリエル王子

バルバラさんは、またもや目をしばたたいてる。

「あー、ガブリエル王女ね」

「え、あの。王女じゃなくて王子……」

「この街ではみんな王女って呼んでるよ」

「なんでですか？」

「あの人、よくこの街に現れるんだよね。城にいと貴族の女の子たちに追いかけて回されるから、逃げてくるみたい。で、そのときのかっこうが……」

「よく現れるって、最近見たのはいつですか？」

「え、さっき外を歩いてたよ。うちのオウムに声をかけてきたから、ちよっとだけお話した」

「こうしちゃいられない！ バルバラさん、また来ます！」

私は呆気にとられてる彼女を尻目に、店を飛び出した。城に行かなきゃ会えないと思ってたのに、ラッキーだ。

カゴの中から猫が話しかけてくる。

「だから、今会ったところで意味ないって……」

「そんな事ないよ、どんな人だかわかるでしょ？　そうすれば対策の立てようもあるじゃない！」

「なるほどね」

私は目抜き通りを歩いて王子を探したが、それらしい人は見当たらない。

「うーん、どこかの店に入っちゃったのかな。そろそろお昼だし」

「ん、スカーレット。あれを見るにゃ」

猫に言われて見てみると、通りの真ん中で二人の女性が向かい合っていた。片方はアンジェリカ、もう片方は十五、六くらいの女の子だ。

私は思わず顔をしかめた。

「うわ、またからんでるよ……あの人、女の子にからむの好きだね」

ガブリエル王子2

私は、からまれてる女の子を観察した。

ウェーブのかかった金のロングヘアに真っ白な肌、澄んだ碧い瞳。ぱっちりした大きな目に高い鼻、整った輪郭、ほっそりした体。

身につけているのは銀のティアラとネックレス、ブラウスにスカート、ハイヒール。他には華奢な日傘をさしている。

彼女は硬直してしまい声も出せない。一方、アンジェリカはここにこ笑いながら近づいていく。

「初めまして、ガブリエル様。アンジェリカと申します」

へー。あの女の子、第二王子と同じ名前なんだね。

そのときようやく、ガブリエルがローズピンクの唇を開いた。

「私に何かご用ですか？」

透き通るようなきれいな声だ。いいなあ、美貌に美声。きっと彼女なら、どんな男性とでも付き合えるよ。

アンジェリカも、目を細めながらワインレッドの唇を開く。

「単刀直入に言います。私の物になってください」

……本当に単刀直入。って、ええっ？

ガブリエルはそれを聞いて、くすくす笑っている。

「冗談はおやめください。私が男に見えるのですか？ それとも、あなたは女性を……」

その瞬間、彼女の顔が赤くなった。急に息使いが荒くなっている。

「は……はあっ、はあっ、はああっ……」

ガブリエルは日傘を落つこととした。その体は震えていて、なんだかヤバそうだ。

ガブリエル王子3

顔を真っ赤にしながらふらついているガブリエルを見て、アンジェリカが微笑みながら近づいていく。

「よかった、てっきり効かないかと思いました。クイーンズ・ラブっていう魔法の香水」

え、おかしいよ。あれは女の子に効かないはずなのに。

でも実際、彼女はあんな状態になってる。どういう事だろう。

アンジェリカは、ガブリエルの体をしっかりと抱きしめた。ちよ、ガールズラブとか興味ないんですけど。

「もう放しませんよ、ガブリエル王子」

……え、ガブリエル王子？

まさか、あの人が？

私は二人に走り寄って叫んだ。

「やめてください！ 道の真ん中でそんな……」

ガブリエルはぼーっとしていて反応しない。アンジェリカだけがこっちを見てにらみつけてくる。

「またあなたなの？ いい加減にしないと痛い目にあわせるよ？」

こ、怖い。でもここで引いちゃだめだよね。」

「王子様を放して！」

「王子？ 何を言ってるの。この子はどう見ても女でしょ？」

そのとき、猫がカゴからとび出した。彼はガブリエルを見ながら言う。

「その子は男だにゃ。魔法で外見と声を女にされてるけど」

や、やっぱり。おかしいと思ったんだよ！

いよいよアンジェリカが目吊り上げる。

「ふーん、邪魔する気？ いい度胸してるじゃない。後悔させてあげるからね！」

ガブリエル王子4

アンジェリカが私に向かって右の手の平を開いた。ヤバい、魔法を使う気だ。

私は攻撃魔法や防御魔法を使えない。他人と戦う機会なんてなかったし、覚えようとも思わなかったのだ。こんな強力な魔術師の攻撃を受けたらひとたまりもない。

「や、やめてください！ お願い！」

「嫌だよ、あなた本っ当に目ざわりだし。一度痛めつけてあげなきゃ気がすまないんだよね」

うう、なんて性格が悪いんだろう。優しさのかけらもないよ。

次の瞬間、私と猫の周りに炎の壁が現れた。逃げ場はどこにもない。こ、殺す気？

アランが毛を逆立てて叫ぶ。

「スカーレット、ボクにつかまって！」

「え、えっ？」

あわてて猫につかまると、彼の体が人間に変わった。その体はまばゆい光を放っている。上半身は裸で、下半身には白い布を巻き付けてあるだけだ。

「アラン、何をする気！」

「じっとしてて！」

そのとき突然、彼の背中から真っ白な翼が出現した。まるで天使だ。

「え、何これ！　あなたは一体？」

叫んでいる間に、炎の壁が四方から迫ってきた。このままでは焼き殺されてしまう。

「や、ヤバイよ！　もうダメ！」

その直後、アランが私を抱き抱えて空高く飛び上がった。地上では炎が激しく燃え盛っている。

彼はしばらく飛翔した後、少し離れた場所に降り立った。途端に体が縮み、元の黒猫へと戻っていく。

「アラン、ありがとう！」

「つ、疲れたにゃ。今のはちょっときついにゃ」

ガブリエル王子5

アランは力を使い果たして倒れてる。アンジェリカがそれを見て口を開いた。

「あなた、まさか堕天使？」

「そうだにゃ」

堕天使と言えば、天使がなんらかの理由で地上に降りて悪魔になったものだ。

「ふーん、でももう魔力が尽きたみたいだね。まだ私に刃向かう気？」

「おまいさんがスカーレットに危害を加える気なら、そうせざるを得ないにゃ」

アランがふらふらと立ち上がったのを見て、私は急いで抱き上げた。彼が驚いて目を見開く。

「スカーレット、何を……」

「いいから！」

私は一目散に逃げ出し……と見せかけて、近くの建物の影に隠れた。戦って勝てる相手じゃない。それなら、隙を見て王子様を奪い取るだけだ。

「どうするつもりにゃ？」

「それを今考えてるんだよ。王子様をどこかに転移させる魔法とか、あの女をどこかに吹き飛ばす魔法とかない？」

「う、うーん……」

こっそり監視していると、アンジェリカは周囲を見回しながら言った。

「邪魔者は消えたみたいね。王子様、行きましようか。あなたを男に戻した上で、ゆっくりとかわいがって差し上げます」

二人を赤い球体が包み込む。ヤバっ、転移魔法だ。アンジェリカは王子を誘拐するつもりらしい。

「アラン、どうしよう！」

「え、え……まいったにゃ」

ガブリエル王子6

アンジェリカは転移魔法で王子をつれ去ろうとしたが、なぜか動かす事ができない。

「くっ……防御魔法がかかってる！」

彼女は仕方なく、手を引いて歩きだそうとした。でも、やはり動かす事ができない。だんだんその目が吊り上がっていく。

「ガブリエル様、どうか一緒に来てください。そんなに私がお嫌いなのですか？」

「そんな事はありません、あなたが大好きです」

王子はそう言いながら、てこでも動かない。彼は前もって強力な魔法をかけられており、悪い人間につれ去られないようコントロールされているのだ。

アンジェリカはふっと笑みをこぼした。

「なるほど、宮廷魔術師に護身用の魔法をかけられているのですね。仕方ありません、今回はあきらめます」

私はその瞬間、悲鳴を上げそうになった。彼女が王子に口づけしたのだ。

王子はあまりの出来事に目をぱちぱちさせている。

「ア、アンジェリカさん……?」

「ふふっ、次回は男性のあなたにキスをしたいです。ではまたお会いしましょう」

彼女の体が赤い球体に包まれたかと思うと、一瞬で消え去った。王子は真っ赤な顔をしながらその場に立ち尽くしている。

私は急いで駆け寄った。

「ガブリエル様、大丈夫ですか?」

「え? は、はい。あなたはどちら様ですか?」

ガブリエル王子7

私は王子の前にひざまずき、顔を伏せて言った。

「スカーレット・フリーセアと申します」

「あ、顔を上げてください。私はガブリエル・ミューラー・アレクサンドロス。この国の第二王子です」

なんか、女性の声で言われると違和感あるなあ……それより、この後どうしよう？

そのとき突然、王子が倒れてしまった。

「ガブリエル様！ どうなさいました？」

「あ、あ……」

見ると、顔が真っ赤になっている。まだ魔香がきいてるみたいだ。

「待っててください！」

私はバルバラさんの店にとび込み、頼んで来てもらった。彼女は王子をしげしげと眺めながら言う。

「あー、まともにきいてるね」

「お願いします、なんとかしてください！」

「とりあえず、私の店に運ぼうか」

私たちは王子の肩を両側から支え、店の一室にあるソファーに寝かせた。彼は顔を赤く染めながら息を荒げてる。

「はあっ、はあっ……アンジェリカ様、どうか私を……」

バルバラさんがそれを見てため息をついた。

「うーん、やっぱりクイーンズ・ラブはもう売らない方がいいね。悪用されるわ。防御魔法もかいくぐるみたいだし」

そんな事より早くなんとかしてほしい。

「バルバラさん、元に戻してあげてください」

「ごめんごめん、ちょっと待ってて」

ガブリエル王子8

バルバラさんはガラスの小瓶に入った香水を持ってきた。ちよ、また魔香ですか？

「スカーレット、これを自分に噴きかけてくれる？」

……はい？

「待ってください、何をどうするつもりですか？」

「ん？ これを噴きかけてから、ガブリエル様を抱きしめてあげてほしいんだよ」

「ええええ？」

私は驚きのあまり硬直してしまった。頭が混乱して何も考えられない。

「な、な……？」

「魔香の効果を打ち消すには、魔香を使うしかないんだよ。彼はそのすごい興奮状態にあるの。これを使えば元に戻るから」

「もしかしたら、私を好きになっちゃうんじゃない……」

「この魔香は相手を落ち着かせる物だよ。だからその効果で惚れる事はないと思うよ」

「あの、抱き着く意味は？ 単に香水の匂いだけかがせればいいんじゃない……」

「ん？ それはあなたに対するサービス。『クイーンズ・ラブを使った女の子より私の方がいいよ』って教えてあげて」

「え、え。惚れさせるのが目的じゃないでしょ？」

「目的は二つ。一つは彼を落ち着かせる事、もう一つはあなたに惚れさせる事。ただし、魔香の効果自体で惚れる事はないよ。自分の力で彼の心を奪い取ってね」

彼女はそう言いながらくすくす笑ってる。絶対楽しんでるよ、この人。

「……わかりました、やってみます」

私は自分の体に香水を噴きかけ、王子の前に立った。相手が男の子だったかなり抵抗あるけど、今の彼はどこからどう見ても美少女だ。これならまだなんとかなる。

ガブリエル様は息を荒げながら身もだえしていた。このままだと発狂してしまいそうだ。

「はあっ、はあっ……アンジェリカ様、アンジェリカ様……」

愛に満ちた抱擁 1

私は、横たわっている王子を抱き上げた。女の私でさえドキッとしてしまうほどの美少女だ。なんかくやしい。

彼が、みずみずしいローズピンクの唇を震わせながらつぶやく。

「アン……ジェリカ様……」

「ガブリエル様、彼女はいません。私はスカーレットです」

「え？」

「彼女の事は忘れてください」

私は王子をしっかりと抱きしめた。その体は華奢で、とってもやわらかい。しかもバラみたいな香りがする。

うーん、やっぱり男に戻ってくれないかな。美少女を抱いても全然嬉しくないし。

バルバラさんが後ろから言う。

「うーん、盛り上がりがないねえ」

「そりゃ、女同士だし」

「男に戻してあげたいんだけど、私にはできないんだよね。めっちゃめっちゃ強力な魔法がかかってるから」

「そうですか……残念」

そのとき、王子がぽつりと言った。

「アンジェリカ様、私が女だから振り向いてくださらないのですか？」

え、何言ってるんだろ。幻覚でも見てるのかな。

「今から魔法を解いて男に戻ります。だから……」

え、ホント？ ラッキー！

「ぜひお願いします！」

その直後、彼の体が光に包まれた。まぶしくてたまらない。

「わ、ちょ……」

しばらくすると光は収まった。目の前には男に戻った王子様がいる。私は彼を抱いたまま硬直してしまった。

愛に満ちた抱擁2

王子は男に戻っても、外見はあまり変わらなかった。髪が短くなり少し背が高くなり、胸がしぼんだくらいだ。

金色のショートヘアに真っ白な肌、澄んだ碧い瞳。ぱっちりした大きな目に高い鼻、整った輪郭、ほっそりした体。

魔法を使わなくても女装するだけで充分だと思う。化粧をして女物の服を着ている今、とても男性には見えない。

でも体が固いので、抱き合っていると男の子だって感じがする。

そのとき、彼が虚ろな目で言った。

「アンジェリカ様、これでよろしいですか？」

え、何を言ってるの。彼女はもういないよ。

バルバラさんが王子の顔をのぞき込みながら言う。

「あらら、幻覚が見えてるみたいだね。魔香の匂いをまともにかぐと、こうなる人がいるんだよ」

そ、そんなに危険な物だったんだ。ヤバすぎる。

王子は私の顔をじっと見つめた後、ひしと抱きしめた。

「もう放しません。私の恋人になってください」

え、こんな展開やだ。アンジェリカと間違えられて告白されると
かありえない。

「バルバラさん、彼が全然落ち着かないんですけど……」

「うーん、クイーンズ・ラブの威力はすごいねえ」

「感心しないで助けてください!」

「ごめん、どうにもならないよ」

「そんなー!」

って、王子がキスしようとしてるし!

「ダ、ダメっ! ガブリエル様、おやめください!」

愛に満ちた抱擁3

私はそう言いながら、体をひねって逃げようとした。

でも無理だ。王子にしっかりと抱きしめられてしまっている。

「やめてよ！ 私はアンジェリカじゃないってば！」

彼女の代理としてキスするのは嫌だ。でも王子はお構いなしに迫ってくる。

「ダメ……ダメ……ああっ！」

必死の抵抗も及ばず、ついにされてしまった。

彼は私を抱きしめたまま、いつまでたっても放してくれない。うう、ファーストキスがこんななんてひどいよ。アンジェリカ、ゆるさない！

王子は熱烈で濃厚なキスをした後、ようやく唇を離した。一方、私は呆然としている。

まあいいか……超絶美少年とキスしたんだし。これで相手がブサ男だったらショック死してよ。

やがて、彼は大きく目を見開いた。

「わ、私は何を？」

「強引にキスをしました」

「ええー！」

驚きたいのはこっちだってば。それより、いつまで私を抱いてるの？

「ス、スカーレットさん……申し訳ございませんでした。なんとお詫びすればいいやら」

「いいえ、お気になさらないでください。ファーストキスを奪われただけですから」

「え、ええー！」

いちいちリアクションの大きい人だなあ。なんかおもしろい。

「本当になんとお詫びすればいいやら……つぐないとして、私にできる事ならなんでもします。どうぞお申しつけください」

「え、なんでもいいんですか？」

「なんなりと！」

「じゃあ、今日から私の奴隷になってください」

「かしこまりました！」

忠実な召し使い 1

え、待って。ちょっと悪ノリしました。今のナシ！

あつ、バルバラさんの顔が引きつってる。

「スカーレット、あなたって子は……」

私はあわてて王子に言った。

「ごめんなさい、今のは間違い。召し使いでお願いします！」

「かしこまりました！」

あれ、バルバラさんが硬直してる。かなり妥協したんだけどダメかな。

「あのね、スカーレット……王子様を召し使いにするとかありえないよ」

「やっぱりダメですか？」

「当たり前でしょ、身のほどをわきまえなさい！」

わわっ、めっちゃめっちゃ怒ってるし。これはヤバイ。

「ガブリエル様、今のもやっぱりナシで……」

「私がかまいません、召し使いとしてお仕え致します」

「だそうです、バルバラさん」

彼女はため息をついてから首を振った。

「あのね、あなたたちがそれでよくても周りが認めないから。不敬罪で牢屋にほうり込まれたらどうするの？」

「えー。じゃあ、二人きりのとき限定で」

「王宮にはたくさんの人がいるんだよ。誰かに影から見られてたらどうするの！」

そ、そうだよね。やっぱダメか。王子様を召し使いにしたら、めちゃめちやぜいたくだと思ったのに。

私が凹んでいると、彼が進み出た。

「大丈夫、私が責任を持って彼女を守ります。強引に唇を奪ってしまったのですし、そのくらいはさせてください」

バルバラさんは肩をすくめている。処置なしと言わんばかりだ。

「あなたがそうおっしゃるなら、もう止めません」

「ありがとうございます！」

「スカートレットをよろしくお願いしますね。この子は今みたいに暴走する事があるから、くれぐれもお気をつけください」

「かしこまりました！」

忠実な召し使い2

私たちはバルバラさんの店を出て王宮へ向かった。一度中に入っ
てみたいと思ってたからだ。

自分一人だけじゃ入れてくれないだろうけど、王子と一緒になら大
丈夫だろう。たぶんね。

彼は男の子に戻ってるけど、相変わらず女の子に見える。私より
ずっときれいなのが気に入らない。

つか、こんな美少女はめったにいないと思う。

「ねえ、ガブリエル様」

「はい、なんでしょう？」

「女の子に化けてたわけは何？」

「貴族の女性たちの目をくらますためです。あの方々が私を追いか
け回すものですから」

はあ、そうなんだ。モテモテなんだね。でもそんなかっこしてた
ら、今度は男性に追いかけて回されるよ。

そんな事を考えながら街を歩いていると、カゴの中からアランが
言った。

「早くも王子様ゲットだにゃあ」

「そうだね」

すると、ガブリエル様が目を見開いた。その視線はアランにくぎつけた。

「その猫は、しゃべれるのですね」

「え？　は、はい」

「すごいですね、抱いていいですか？」

「どうぞ」

王子はアランを抱き上げた。その瞳がキラキラと輝いている。

「すごいなあ。猫の使い魔はよく見るけど、言葉を話せるのはめったにいないんですよ」

いや、使い魔じゃないんだけど……ま、いっか。

「これほどの猫を使っているという事は、スカーレット様は大魔法使いなのでしょうね」

王子様と一緒1

大魔法使い？

それどころか並以下です。ろくな魔法が使えません！

「いえ、あの。実は……」

「あこがれます。私も強力な魔法を習得したいと思ってまして。ぜひご教授をお願いします！」

王子は猫を地面に下ろし、碧い瞳を輝かせながら私の手を握りしめた。

わあ、やめて。そんなキラキラした目で見ないで！

「ち、違います。私はそんな……」

必死に首を振っていると、アランが言った。

「ボクは今まで、スカーレットほどのすごい魔法使いを見た事がないにゃあ」

わ、バカ。何を大嘘ついてるの！

ガブリエル様はすっかり信じてしまったようで、満面に笑みを浮かべてる。

「すばらしい！ 魔法国家である私が国において、あなたはこの上なく価値ある存在です！」

私はアランをにらみつけた。でも彼はそっぽを向いてあくびをしてる。こ、この嘘つき猫！

いくら否定しても王子は信じてくれない。もうめんどくさいし、ほっとう。

ところがそのとき、王子がとんでもない事を言いだした。

「実は今度、王宮で魔法大会が催されるのです。スカーレット様もぜひ参加なさってください」

「ええっ！」

そんな事したら、ボロが出るのは間違いない。絶対嫌です！

「む、無理！ 私なんかとても……」

「喜んで出場させてもらうにゃあ」

「アランー！」

王子様と一緒2

なんか、とてつもなくヤバい事になっちゃったよ。

王宮で開催される魔法大会については聞いた事がある。強力な魔術師が集まって実力を競い合うらしい。

そんな中に私みたいなへっぽこが出ていったらどうなるでしょうか？

恥をさらす事間違いなし！

「ガブリエル様、私やつぱり……」

「いやあ、楽しみだなあ。スカーレット様の魔法をこの目で見るなんて」

……ダメだ、今さら断れない。

私は意気消沈しながら、彼と一緒に街を歩いた。もうどこにでもなればいいよ。

目抜き通りを進んでいくと、やがてこの国の王城であるセレスティアラ城が見えてきた。

セレスティアラは巨大な湖の真ん中にある。白鳥が浮かんでるみたいなので白鳥城とも呼ばれていて、とてもきれいなお城だ。

真っ白な城壁が円形に城を取り囲み、その中に四つの尖塔がそび

え建つ。私に言わせれば白鳥より、ローソクを立てたショートケーキって感じ。

尖塔の屋根が赤くて炎みたいだし。

それにしても、丸い城壁って初めて見たよ。

「ガブリエル様、なんで城壁が丸いんですか？」

「ここが魔法国家だからです」

……意味わかんないし。

それにしても、あんなきれいな所に住んでるなんてうらやましい。私のほったて小屋とは天と地だ。

「いいなー、あんな城に住んで……」

「では一緒に暮らしましょうか？」

「え、いいんですか！」

「どうぞどうぞ。美男子がたくさんいますし、きっとお気に召されると思いますよ」

やったああああ！
イケメン最高ー！

王子様と一緒3

私は大喜びで王子の後についていった。

湖のほとりからセレスティアラ城まで、一本の白い石橋が架かっている。幅は大人の男性二人を縦に並べたくらいだ。

つか、さくがないのが怖すぎる。端っこを歩いてうっかり転んだら、湖の中に落ちてしまう。

「ガブリエル様、どうしてさくがないのですか？」

「ここの住民たちから要望がありましたので」

「城の人ですか？」

「いえ、湖の住人です」

湖の住人って……魚なんかですか？

うーん、不思議。

目をぱちぱちさせながら歩いていくと、ようやくその正体がわかった。湖の中から一匹の人魚がとび出してきたのだ。

見た目は、十七歳か十八歳くらい。ふわっとした内巻きカールの金髪、白い肌に赤い瞳、すっきりした顔と体。上半身は人間なのに、下半身はチェリーピンクの魚。

身につけているのは白いビキニ、金のティアラと腕輪。とにかく

スタイルが抜群で、セクシーさが半端ない。

つか、水の中を泳いできてそんな髪型を保てるなんて普通ありえない。さすが人魚。

彼女は王子を見るなり、にっこりと微笑んだ。

「お帰りなさい、ガブリエル！」

……って、呼び捨て？

私はあわてて王子にたずねた。

「この方は？」

「クリスティーナ様です。人魚の国の女王ですよ」

王子様と一緒4

クリスティーナが微笑みながら王子に抱きついたのを見て、私は顔が引きつってしまった。

ガブリエル様も笑みを浮かべながら彼女を抱きしめている。もう黙ってられない。

「あ、あのっ！ 人前でそんな……」

声をかけると、二人はやっと離れてくれた。王子が笑顔のまま話しかけてくる。

「紹介させていただきますね。こちらはクリスティーナ・ガーネット様。人魚の国エリアスを治める女王陛下です」

私は思わずその場にひざまずいた。彼は女王に視線を移してさらに続ける。

「こちらはスカーレット・フリーセア様です。えーと……」

なんて紹介していいか迷っているらしい。さすがに「私のご主人様です」とは言えないんだろう。

クリスティーナは微笑んでいるけど、目が笑ってない。その視線が容赦なく私に突き刺さる。

「スカーレット様、あなたはガブリエルとどういったご関係なのでしょうか？」

「あ、あのっ……」

「私は将来、彼を自分の国に迎えようと思っているのです」

そ、そうですか。まいったなあ。

「スカーレット様？」

「そ……その、単なる侍女です！ 今後、ガブリエル様に仕えさせていたきたいと……」

「そうですか。ぜひがんばってくださいませ。では失礼致します」

彼女が水中へ去ったのを見て、私は心底ほっとした。いつの間にか、周囲に金髪の人魚たちが集まってこっちを見ている。たぶん侍女か何かだろう。

それにしてもライバルが強力すぎる。大魔法使いアンジェリカと
言い、人魚の女王クリスティーナと言い、並大抵の相手じゃない。

気を引きしめていかないとね！

王子様と一緒5

城へと続く石橋を渡りながら、私は王子に聞いてみた。

「人魚の国エリアスって、どんな所なんですか？」

「見た目は人間の国と大差ありません。この国に隣接してまして人口は二万人だそうです」

「ずいぶん少ないんですね。国民全員が人魚なのですか？」

「ほとんどがそうですね。ちなみにエリアスの人魚は全て女性です」

「え、子どもが産まれないんじゃない？」

「そのために人間の男性を選んでつれていくわけです。産まれる子どもはやっぱり人魚なんですけどね」

なんか、ものすごく不思議な国だ。

「彼女たちを見てどう思いましたか？」

「美人ばかりだなーと」

「彼女たちはかなりのメンクイでして、美男子だけを選んでつれていくんです。そのせいですね」

ええっ、イケメンだけさらっていくなんて人間の女性の敵だよ！

「それで、今回はガブリエル様選ばれたわけですか？」

「はい。クリスティーナ様のご執心のようで、わざわざこの湖にいらっしゃってます。女王があまり国を留守にするのも問題なので、早く帰国するように申し上げているのですが……」

「聞く耳を持たない、と」

「はい。『あなたと一緒にでなければ帰りません』と駄々をこねておいでです」

うーん、困った人だね。まあ、イケメンをゲットしたい気持ちはわかるけど。

やがて私たちは城門に着いた。鉄の格子戸があって中に入れない。でも城壁の上に見張りの兵士がいて、王子を見るなり門を開けてくれた。ゆつくりと鉄格子が上がっていく。

「スカーレット様、参りましょう」

「は、はい！」

二人目の王子様

門を通ってもすぐ城に入れるわけじゃない。まだ先がある。

私と王子は、白い石畳の道を歩いていった。周りにはきれいに刈りそろえられた芝生が広がっていて、その所々に花壇がある。

「本当に広いですね、驚きました」

「そうですか？ 私は慣れてるせいかな何も感じないのですが」

さすが王子様。そりゃ小さい頃からこんな所に住んでればそうなるよね。

ひたすら感心していると、真っ白な甲冑と緋色のマントを身につけた男の人が歩いてきた。

歳は二十歳くらい。短い金髪に白い肌、碧い瞳、切れ長の目。すごく背が高くて、きりっとした顔をしてる。

腰に突剣を佩いている所を見ると騎士かな。とにかくカッコいい。

彼は立ち止まって王子に声をかけた。

「おお、ガブリエル。どこに行っていた？」

「少し街へ出ておりました」

「そうか。そちらの女性は？」

「スカーレット・フリーセア様です。大魔法使いですよ」

「お初にお目にかかる、スカーレット殿。私はミカエル・ミュラー・アレクサンドロス。この国の第一王子だ」

「は、初めまして！」

彼はにっこりと微笑んだ。うわあ、王子様だったなんて。きっと、ガブリエル様と並んで大人気だね。

「ところで兄上、これからどちらへ？」

「国境付近にある城塞都市アデルだ。隣国ヴィクタリスから攻撃を受けているので救援に行く」

「お一人で向かわれるのですか？」

「私一人で充分だろう。何か不満か？」

「いえ、失礼しました。どうかご武運を」

「うむ、留守は任せたぞ。さらばだ」

ミカエル様は颯爽と去っていった。ああ、なんてイケメン。また会いたいです。

「ガブリエル様、あの方はたった一人で大丈夫なのですか？」

「問題ないでしょう、兄は優秀な魔法剣士ですから。私は、あれほ

ど強い人間を他に知りません」

へえ、一国の軍勢を相手に渡り合うなんて桁違いだね。

「ここローゼンハイムは魔法大国と言われるだけあって、優秀な魔術師や魔法剣士を数多く輩出しています。王家の人間も例外ではありません」

王城の中へ1

石畳の道を歩き続けると、ようやく王城にたどり着いた。

その威容にびっくりしてしまった。こんな大きくて立派な建物は見た事がない。

大人の男性の身長を1フィードとすると、この城の高さはゆうに30フィードを超えるだろう。

全体は四角い形をしていて、四隅に尖塔がそびえ立っている。外壁は真っ白で、白鳥城と呼ばれるにふさわしい。

「こんなに大きいなんて……」

「ふふ、驚きましたか？」

「私の村はすごい田舎で、高い建物なんかなかったから……」

「そうですか」

王子につれられて中に入った途端、私はまたびっくりした。

とにかく広い。向こう側の壁まで20フィードはあるだろう。

床には緋色の絨毯が敷き詰められ、白い壁には金の燭台が埋め込まれている。

天井には女神や天使の絵が描かれていて、窓はステンドグラスだ。

そこから差し込むやわらかな光が城の内部を照らし出す。

すぐ横に階段もあり、金色の手摺りの所々に騎士や魔術師の像が立っている。その一つ一つが躍動感に満ち溢れていて、しかもすぐリアルだ。

私はひたすら驚いていた。生まれてこのかた、こんな豪華な建物に入った事がない。

「ふわああ、すごい！」

「何度も感激していただいて恐縮です」

「私、こんな所にいいんでしょうか？ ものすごく場違いな気が……」

「そんな事をおっしゃらず、ご自分の家だと思っておくつろぎください」

そのとき、向こうから一人の女の子が歩いてきた。

歳は十七、八。銀色で外巻きカールのセミロングヘア、白い肌、紫色の瞳。ぱっちりした目に整った輪郭、ほっそりした体。

着ているのはベアトップのカクテルドレスで、色はバイオレット。スカートがふわっとしているのは、パニエでふくらませているんだろう。

彼女は王子に視線を合わせ、微笑しながらピンクベージュの唇を開いた。

「ガブリエル様、ご機嫌よう。城下街はいかがでしたか？」

王城の中へ2

王子も微笑しながら口を開く。

「これはこれは、エリザベート様。女性に誘惑されて困りました」

その途端に彼女の眉が吊り上がった。こ、怖い。

「なんですって？ その女の名前をおっしゃってください。私がすぐ……」

「もう解決しましたから、どうか手荒な真似はおやめください」

「まさか、そこにいらっしゃる女性ではないですよね？」

「いえ、違います」

エリザベートが私に疑惑の目を向ける。美人なのはいいけど、めっちゃめっちゃ怖い。体が凍り付きそうだ。

「そうですか。ところで、そちらの女性はどちら様？」

「スカーレット・フリーセア様です」

「ガブリエル様とどういったご関係？」

「ええと……」

私はあわてて「侍女です」と言おうとした。こうなったら、表向

きは侍女という事にしておこう。無難だし。

と思ったのに、彼は余計な事を口走った。

「大切な友人です」

「ご友人……ですか……」

「はい」

エリザベートは目を細めて私を凝視してる。疑ってるのは間違いない。

それでも彼女は丁寧なお辞儀をして言った。

「スカーレット様、お初にお目にかかります。私はエリザベート・アルテラ・ウィンストンと申します。ウィンストン公爵の娘です」

こ、公爵家のご令嬢。そんな人が一人でうろろしないでほしい。

「ス、スカーレット・フリーセアです。一般庶民で……あうあう」

「まあ、平民の方ですか」

「は、はい」

私はうつむいてしまった。あまりにも身分が違いすぎる。

公爵と言えば、この国の貴族の中で最高位だ。侯爵も伯爵も子爵も男爵も及ばない。かたやその令嬢、かたや平民。ほとんど天と地

だね、こりゃ。

そんな私の気持ちを知ってか知らずか、王子は早々と彼女に別れを告げた。

「エリザベート様、そろそろ失礼致します。友人を案内しなければなりませんので」

「まあ、これはお邪魔致しました。それではご機嫌よう」

ガブリエル様は私の手を引いて歩きだした。背後から突き刺すような視線を感じる。いや、視線って言うより殺気かもしれない。

カゴの中から、猫がのんびりと言う。

「いやあ、ものすごい悪意を感じるにゃあ。おかげでボクの力もガンガンたまるにゃあ」

「……よかったね」

「うん！ スカーレットのおかげだにゃあ」

王城の中へ3

私は、王子につれられて城の中を歩きながら考えた。

ガブリエル様がイケメンなのはいいけど、それだけに強力なライバルが多い。

大魔法使いアンジェリカ、人魚の女王クリスティーナ。それだけでもきついのに公爵令嬢まで出てきたらおしまいだ。

単なる平民でへっぽこ魔法使いの私に、一体どうしろと言うんだろう。

ひたすら凹みまくっていると、カゴの中から猫が言った。

「大丈夫、ボクがついてるにゃあ」

「はあ、どうもありがとう」

「元氣ないにゃあ」

「ねえ、アラン」

「にゃ？」

「私の魅力って何かあるかなあ？」

あ、黙ってる。一つくらい見つけてよ、頼むから。

「うーん……」

「え、まさか一つもないとか？」

「にゃい」

「うわー！」

ひどい。これが女の子に対して言う言葉だろうか。

そのとき、王子が微笑みながら話しかけてきた。

「スカーレット様は、とてもかわいらしい女性だと思います」

「えっ、お世辞とかいらないです」

「いえ、本心から申し上げているのですよ」

にこにこしている彼を見て、私は感動してしまった。血も涙もない猫とは大違いだ。

「ありがとうございます」

「とんでもございません。それで、あなたに住んでいただくお部屋なのですが……」

「は、はいっ」

「こちらなどうかでしょうか？」

彼は私を部屋に案内した。中はやたら広く、十フィード四方くらいある。

金や銀の糸で彩られた真紅の絨毯、天井から吊り下がった豪華なシャンデリア、つやつやと輝く真つ白なテーブルに椅子。ソファやクッション、燭台、クローゼットや鏡台などもそろっている。

どの家具もすごく高そうだ。ひたすら恐縮していると、王子がさうに言った。

「あちらに寝室があります」

奥にもう一つ部屋があり、そこには金色の天蓋が付いたベッドが置いてあった。

縦の長さは普通のベッドと変わらないけど、横幅が大人の男性の身長くらいある。いわゆるクイーンサイズだ。一人で寝るには大きすぎるかもしれない。

「お気に召しましたでしょうか？」

「はい、気に入りました！ 本当にこの部屋を使っているんですか？」

「どうぞご自由に」

こんな部屋で寝起きしてたら、自分がお姫様だと錯覚しそうだ。まあ、それもよし！

王城の中へ4

私はその後、王子につれられていろいろな人に紹介してもらった。

国王、王妃、王女、大臣、執政官、将軍、近衛兵長……あまりに多すぎて覚えきれない。とりあえず、十人の将軍のうち三人がかなりのイケメンだ。

さんざん城の中を歩き続けたら疲れてしまった。王子はそれを察したらしい。

「スカーレット様、あちこちつれ回して申し訳ございません。どうかご自分の部屋でお休みになってください」

「あ、はい。ありがとうございます」

「後でお茶菓子をお持ちします。何がお好みですか？」

「え、あの……なんでもいいです」

「かしこまりました。では一旦失礼しますね」

彼は深々と礼をして立ち去った。

うーん、私みたいな平民がこんな扱いを受けていいんだろうか。だんだん不安になってきたよ。

「ねえ、アラン」

「にゃ？」

「なんでガブリエル様は、こんなに私を大切にしてくれるんだろうね。強引にキスしちゃったからって、あまりにも……」

「わからないのかにゃ？」

「わからないから聞いてるんじゃないの」

「ふーん」

「え、もしかしてわかるの？　じゃあ教えてよ」

「やだ」

「なんで！」

「いちいち説明しなくても、そのうちわかるにゃ」

「教えてよ、ケチ！」

彼はあくびをするだけで答えない。私に協力するとか言っておきながらひどい話だ。

まあこんな猫は放っておいて、いい加減に休もう。

私は自分の部屋に入り、ソファアに座った。すごくふかふかで、自分の体が埋もれてしまいそうだ。

「わあ、すごーい！　気持ちよすぎ！」

「スカーレットの家のボロっちいソファーとはえらい違いだにゃあ」
「うるさい！」

本当に余計な事を言ってくれる。もふもふじゃなかったらどこかに置き捨ててるところだよ。

「あー、もう天国ー！」

そのときアランが妙な声を上げた。

「あにゃ？」

「何、どしたの？」

「ほら、そこに」

え、なんだろ……って、きゃああああ！

「ど、どこから入ったの！」

床で銀色のヘビがとぐろを巻いて、舌をチロチロと出している。

「スカーレット、下がるにゃ！」

「う、うん！」

アランが私を逃がしてヘビの前に立ちふさがった。このもふもふ、やるときはやる。

一方、私は必死で叫んだ。

「誰か、誰か来て！」

嫉妬の令嬢

ところが一人として来てくれない。近くに衛兵がいないようだ。

「アラン、待ってて！ 誰か呼んでくるから……」

「動いちゃダメにゃ！ こいつの狙いはスカーレットにゃ！」

確かにヘビは私をじっと見ている。何か恨まれるような事したかなあ。

そのとき、いきなりヘビがしゃべった。若い女性の声だ。

「スカーレット、正直に言いなさい。ガブリエル様とどういう関係なの？」

え、この声はエリザベート様？

「あ、あなたはエリザ……」

「質問に答えて！」

ヘビが大きく口を開いて牙をむき出す。今にもとびかかってきそうな勢いだ。

「ど、どんなんて……言えません」

王子を召し使いにしたなんてばれたら、何をされるかわからない。

「そう、言えないのね……やっぱりそういう関係だったんだね！
許せない、平民の分際でガブリエル様をたぶらかすなんて！ 覚悟
なさい！」

ヘビは私をじっと見つめ、詠唱を始めた。

「冷厳なる氷の女帝よ、我が命の下に結晶の花を咲かせ彼の者の魂
を散らせたまえ！」

ヤバイ、強烈な魔法が来る！

「ノーブル・クリスタリゼーション！」

周りの空気が一気に冷えたかと思うと、無数の氷の矢が現れた。
このままではやられてしまう。

「アラン、助け……」

「にゃにゃー！」

猫の体が光輝く。こうなったら彼を頼るしかない。

「にゃー！ セラフィック・バリア！」

氷の矢が殺到する直前、私の背中から真っ白な翼が現れて体を包
み込んだ。再び翼が開いたとき、矢はすべて床に転がっていた。

「アラン、すごい！」

「にゃははは、それほどもあるにゃ！」

収まらないのはエリザベートだ。怒りで体を震わせた後、猫に向かって怒鳴った。

「一体あなたはなんなの、邪魔しないでよ！」

「ボクは墮天使アラン、今はスカーレットの守護神だにゃー」

「何が守護神よ、いい気にならないで！」

「おまいさんこそ、もうあきらめたらどうかにゃ？」

「誰があきらめるものですか！」

ヘビが牙をむき出して猫にとびかかる。

「アラン！」

「にゃー！」

二匹の体が空中で交差した。床に降り立った猫にけがはない。

一方、銀のヘビはのたうち回っていた。その体にひっかき傷が刻まれている。

「い、いったーい！ よくも、よくもこの私に……！」

「ふふん、まだやるかにゃ？」

「くっ……！」

王子様再び

銀色のへビは部屋から逃げだした。アランが叫びながら後を追う。

「逃がさにゃい！」

ちょ、待ってよ。私を置いてかないで！

あわてて後をついていくと、彼は廊下で立ち止まった。その視線の先にはエリザベートがいる。

「スカーレット様、どうかなさいましたか？」

うわ、白々しい。いきなり襲っておいてそれはないでしょ。

「エリザベート様、私が気に入らないからといって危害を加えるのは……」

「なんのお話でしょうか？」

エリザベートはにこにこ笑っているけど、目は真剣だ。そのときアランが彼女に向かって言った。

「言い逃れはできないにゃ。その腕の傷はなんにゃ？」

見ると、左腕に引つかかれたような傷があった。彼女がそれを隠しながら言う。

「これはお見苦しい物を……先ほど野良猫に引つかかれましたの」

「よくそんな嘘をつけるにゃ、それはボクがつけた傷にゃ！」

「いいえ。私は中庭を散歩しておりましたし、あなたと関わった覚えはございません」

両者の間に火花が散っている。それにしてもこの人、どれだけ図太いんだろう。

そのとき、ガブリエル王子が現れた。今度は男物の礼装を身につけてる。

あと、後ろにお皿にのったケーキやポット、ティーカップがふわふわ浮いてる。王子は浮遊魔法も使えるらしい。

彼は私とエリザベートを交互に見てから言った。

「何かあったようですね」

彼女が憤慨しながら口を開く。

「スカーレット様の使い魔が言いがかりをつけるのです。私が彼女に危害を加えたなどと……」

「使い魔君、どういう事ですか？ 説明してほしいのですが」

「その女が銀色のヘビに化けて、スカーレットを襲ったんにゃ。なのにしらばっくれてるんにゃ！」

「私はそんな事をしていません！」

「したにゃ！」

「いいえ！」

二人がにらみ合うのを見て、王子は肩をすくめている。

「危害を加えたとは、ヘビに化けてかみついたという事ですか？」

「魔法でスカーレットを焼き殺そうとしたにゃ！」

え、違うでしょ。氷の矢で突き刺そうとしたんだよ。

猫の言葉を聞いたエリザベートはにやりと笑った。

「ほら、彼は嘘を言ってますでしょ？ 私は炎系の攻撃魔法を使えません。放ったのは氷系の魔法で……はっ？」

彼女はあわてて口を押さえたが、もう遅い。王子が顔をしかめて言う。

「エリザベート！」

「ご、ごめんなさいガブリエル！ もうしないからゆるして！」

「大切な客人になんて事を……スカーレット様に謝りなさい！」

公爵令嬢は涙目になりながら、ぺこぺこと頭を下げている。

「スカーレット様、大変申し訳ございませんでした。二度とこのよ

うな真似は致しません。どうかおゆるしく下さい」

王子様とお茶

エリザベートが泣きそうになりながら謝るので、私は笑みを浮かべながら言った。

「いいですよ、もう気にしてませんから」

本当は結構気にしてるけどね。危うく命を落とすところだったし。

彼女は何度も頭を下げ、別れを告げて立ち去った。王子が眉をひそめながら言う。

「私からお詫びします。エリザベートとは幼なじみなのですけど、どうも嫉妬深いところがあって……」

嫉妬深いのも、あそこまでいくと異常だよ。まあ口に出して言わないけど。

「もう気にしてませんから」

「よかった。ところで、お茶菓子をお持ちしましたので召し上がってください」

そう言えば、ケーキやポットが彼の後ろに浮いてる。

「すごい……これなら召し使いがいらないですね」

「ええ、まあ」

私は王子と一緒に部屋に入り、椅子に座った。目の前のテーブルに色とりどりのケーキが並べられていく。

「好きな物をお好きなだけどうぞ」

「ありがとうございます。いただきます」

真っ白なショートケーキやレアチーズケーキ、真っ黒なフォンダンシヨコラやザッハトルテ。赤いストロベリームースや苺のタルト。黄色いベイクドチーズケーキ、焼きプリン。

他にもいろいろあるけど、何から手をつけていいやらわからない。

「えーと……」

「こちらなどいかがでしょうか？」

彼が差し出したのは、手の平に収まるくらいのちょこんとしたタルトだった。それが七つ、お皿の上に並べられている。ちなみに全部色が違う。

「かわいいー！」

「七色のタルトと呼ばれておりまして、王宮のシェフが腕によりをかけて作った物です」

「いただいてよろしいのでしょうか？」

「どうぞどうぞ」

私は紫色のタルトを手にとって食べてみた。ものすごくやわらかい。口の中でとろける。

ブルーベリーやクランベリーなどの果実やホイップクリームが乗っていて、見た目はかなり甘そうだ。でも実際はクリームや生地ของ 甘みを抑えていて、すごくさっぱりしている。

これなら何個でも食べられそうだ。私はティーカップに入ったミントティーを飲みながら、七個全部平らげてしまった。

「ごちそう様でした。本当においしかったです」

「もうよろしいのですか？ 他のケーキもぜひどうぞ」

「え、じゃあいただきます」

私はフォンダンショコラを食べてみた。丸いチョコレートケーキで、生地はしっとりしている。溶けたチョコレートが入っていて、それが口の中で広がっていく。

これも甘くない。むしろビターで大人の味って感じがする。

「おいしいーい、幸せー！」

宮廷魔術師 1

あまりにおいしいので、私は他のケーキも片っぱしから食べてしまった。どれも最高級の素材を使っているそうで、いずれ劣らぬおいしいさだ。

それにしても、王子が全然ケーキに手を出さない。ひたすらローズヒップティーとカモミールティーを飲んでいる。

「ガブリエル様は召し上がらないのですか？」

「ええ」

「甘い物がお嫌いなのですか？」

「いえ、そうではなくて……太多了から」

ぎゃー！

お腹一杯ケーキを食べた私の前で、そんな事を言わないでください！

「男の人でも、太るとか気にするんですか？」

「人によろと思います」

「と、とにかく運動しないと……」

「では、散歩がてら魔法図書館へご案内しましょう」

私は彼について部屋を出た。廊下は回廊になっていて、内側には中庭がある。

綺麗に刈り込まれた芝生に花壇、噴水、天使の彫像。それらを柔らかな日の光が照らし出す。

その美しい光景の中に、二十歳くらいの女性が立っていた。ストレートロングの金髪に碧い瞳、すっきりした顔と体。

着ているのは淡い水色でスレンダーラインのドレス、白いストール。他には銀のイヤリング、腕輪、ハイヒールを身に着けている。

彼女は私たちを見つけるなり、丁寧な礼をした。

「これはガブリエル様。城下街は楽しかったですか？」

王子が苦笑しながら言う。

「あなたに黙って出かけたのに、お見通しですね」

「それはもう。ガブリエル様が魔香で惑わされた事も存じております。あれは盲点でした。宮廷魔術師でありながらあなたを守り切れず、大変申し訳ございません」

私はぎょっとした。この女の人は王宮の中にいながら、王子がどこで何をしていたか全部知っているのだ。並大抵の魔術師じゃない。

絶句していると、彼女は私に視線を合わせて言った。

「スカーレット・フリーセア様ですね？ 私はセレス・マーキュリ

ーと申します。ガブリエル様を助けていただき、誠にありがとうございます」

「あ、いえ。そんな……」

すべてを見透かすような澄んだ瞳に、私はたじたじだった。きっとこの人は、私がへっぽこ魔法使いだという事も見抜いているだろう。ああ恥ずかしい。

宮廷魔術師 2

セレスは猫をじっと見つめた。ヤバっ、彼が悪魔なのがバレちゃう。

ひやひやしていると、彼女は私に視線を移して言った。

「悪魔の力を借りるなど、あまり感心できませんね」

「す、すみません。おっしゃる通りです」

「汚れた者と交わっていれば、あなたの心も汚れてしまうかもしれません。近い内に手を切る事をおすすめします」

「は、はい」

そんな事を言われても困る。私はアランがいなきゃ何もできないのに。

「ではガブリエル様、スカーレット様、失礼致します。ご機嫌よう」

彼女はゆっくりと歩き去った。なんて言うか、清らかで神々しい人だ。どす黒いアンジェリカとは正反対って感じがする。

「ガブリエル様、宮廷魔術師はどんな仕事をしているんですか？」

「この王宮、もしくは要人に対する魔法攻撃を防ぐ役割をしています」

「魔法攻撃？」

「はい。ここローゼンハイムは超大国ヴィクタリスと敵対しています。その国の人間が危害を加えてくる事が多々あるのですよ」

「例えば、どんな事をしてくるんですか？」

「国王に雷を落したり、王宮に毒の霧を発生させたり」

へえ、なんて危険なんだろう。そんなの普通の人間じゃ対応できない。

「それを防いでいるのがセレス様なのです」

「はい。しかしながら、最近は彼女一人では手が回らなくなっております」

王子は澄んだ碧い瞳で私を見つめた。

「私が城下街へ出向いた本当の目的は、優秀な人材を探す事なのです。今この国が必要としているのは、王宮を守ったり隣国ヴィクタリスの軍勢を退ける事のできる強力な魔術師です。あなたに出会えたのは本当に運がよかった」

「えっ？」

このとき、はっきりと理解した。彼が私をもてなしてくれている本当の理由は、宮廷魔術師として召し抱えようとしてるからだ。

本来、王族である彼は国民を呼び出して強制的に仕えさせる事も

できる。しかし、強力な魔術師は万単位の軍隊を一瞬で消滅させるほどの力を持つ。

つまり実際のところ、彼らはその気になれば王族の命令を拒む事が可能だ。

だから、王子は私の機嫌をとっているわけだね。断られたら困るから。

宮廷図書館1

王子は私を、宮廷の中にある一室へと案内した。

彼が扉を開いたとたん、私は息をのんだ。そこはものすごく長細い部屋で、向こう側の壁がかすんで見えない。

横幅は全然たいした事なくて5フィードくらいしかないのに、とにかく縦の幅がすごすぎる。

床には真紅の絨毯が敷かれ、両側の壁には木製の本棚が延々と並び、一体何冊の本があるのか見当もつかない。

「す、すごい……」

呆氣に取られていると、彼が微笑んだ。

「部屋自体はそれほど広くないのですが、魔法で空間を拡張しているのです」

「そ、そうなんですか。でもこんなに本があつたら、探すのも大変ですね」

「いえ、特に。優秀な司書がおりますから」

「え、どちらに？」

王子が手を叩くと目の前に煙が立ち上り、一匹のハムスターが現れた。って、司書がねずみ？

「初めまして、司書のアレクサンダーだよ！」

げ、しゃべった。それにしても似合わない名前だね。

ちょこんとした体に、てかてか光るつぶらな瞳。色は白とオレン
ジの二色だ。はっきり言ってかわいい。

「え、あなたが司書って……」

「何か問題でも？」

「そもそも、本を持ってないじゃないの」

「魔法を使って運ぶんだよ！」

「でも、どこになんの本があるのか……」

「一冊残らず記憶してるよ！」

す、すごい。ハムスターおそるべし。

「ところで、君の名前は？」

「スカーレット・フリーセアだよ、よろしくね」

「ふーん、きれいな名前だね。ちよつと名前負けしてるって言うか
……」

すみません、このねずみを踏んでいいですか？

「どんな本を探してるの？」

「え？ えっと」

別にそういう目的で来たわけじゃない。そこで王子をちらつと見ると、彼はにこにこしながら言った。

「せっかいですし、好きな本をお探しになってはいかがですか？」

「え、ありがとうございます」

私は、その場にしゃがみ込んでアレクサンダーに言った。

「じゃあ、恋愛小説が読みたいなあ」

「ふーん。じゃあこんなのはどう？」

彼がちっちゃな前足を上げると、その前に一冊の本が現れた。タイトルは「羽根ペンとティーカップ」だ。

「え、何これ」

「こういうのが読みたいんでしょ？」

私は目が点になってしまった。ペンとティーカップのどこが恋愛に結び付くのかわからない。

すると、ハムスターが解説を始めた。

「どういうあらすじかと言うとね」

「待って待って、予想してみるから！」

私は必死で考えた結果、一つの答えをひねり出した。こんな感じなら恋愛になるだろう。

「一人の女流作家がいました。彼女を好きな男性が『プレゼントに何がほしい？』と聞いたら、『羽根ペンがほしい』という答えが返ってきました」

「ふんふん」

「彼女は本当に仕事熱心で、小説の事しか考えてなかったのです。その顔は連日の執筆でやつれていました」

「それで？」

「ところが、彼がプレゼントしたのはティーカップでした。彼女が怒ると、彼はこう答えたのです。『今の君に必要なのはペンじゃない。温かい飲み物と休養だよ。これからは僕が君のために、毎日おいしい飲み物を作ってあげる』って」

がんばって答えたのに、ねずみはそっぽを向いている。

「何、その反応」

「いや、全然違うし」

「残念。でも、おもしろいあらすじでしょ？」

「さっぱり」

……やっぱり、このねずみを踏んでいいですか？

宮廷図書館2

私は憤慨しながらハムスターにたずねた。

「じゃあ、どういう話なわけ？」

「羽根ペンとティーカップが恋に落ちる話だよ」

え、その二つが恋に落ちて何が起きるんだろ。

「あの、具体的にはどういう……」

「まず羽根ペンがティーカップに恋をするんだ。でもしゃべれないし、自分で文字を書く事もできない。だから、ひたすら心の中で愛の言葉をささやく。これが前半部分」

「はあ」

「それで、ティーカップも羽根ペンに恋をするんだけど、やっぱりしゃべれない。だから心の中で、ペンと幸せに暮らしている自分を想像して楽しむんだ。これが後半部分」

なんて言うか、単なる妄想じゃないかな。

「ふーん。最後はどうなるの？」

「その家のご主人が、うっかりティーカップを割ってしまい終了」

「ち、超つまらない……バッドエンドだし」

「そんな事ないさ。後半部分なんかすごいよ。ティーカップが自分の中に水を入れてプールを作り、羽根ペンを泳がせるんだ。その幸せそうな事と言ったら、同種族の生き物同士でもなかなかこうはいかないってくらいのこと……」

「妄想の中でしょ？」

「うん」

「駄目じゃん！」

「わかってないなあ」

ハムスターがふっと息を吐き、諭すように言う。

「ペンとティーカップがいくら恋に落ちても、幸せそうに装っても、それは他者の目から見れば滑稽でしかない」

「まあね」

「大半の読者はそれを『くだらない』と言うだろう。でも、一部の読者は感じとるわけさ。例えば滑稽であっても報われなくても、彼らの中には本物の愛が存在したという事を」

わかったような、わからないような。

「要するに、何を伝えているかと言うとね。『羽根ペンとティーカップの間ですら恋愛が成立するんだから、人間と人間なら性別が同じだって恋愛できるでしょ？』って事」

なんかものすごく強引な意見だ。

「もしかして、その本の作者は……」

「そう、レズ」

「きゃああああー！」

宮廷図書館3

あわてふためいてる私を見て、ハムスターが笑い声を上げた。

なんてひどいねずみだろう。どっかの猫と同レベルだよ。

王子が眉をひそめながら言う。

「申し訳ありません、スカーレット様。彼は来訪者をからかうのが大好きなもので……」

「そうなんですか、迷惑ですね」

「でも優秀な司書ですし、頼りになりますよ」

……だったらいいんだけどね。

私がふくれていると、アレクサンダーが笑いをこらえながら言った。

「ぶぶ、ごめんごめん。いいリアクションするねえ。今度はまともな本を探してあげるからさ」

「……本当に？」

「うん、だから機嫌を直してよ」

今度変な本を出したら、ふんづけてやる！

「じゃあ魔法の教典を出して。最強のやつ」

「了解！」

彼が左右の前足を振り上げたとき、一冊の分厚い本が現れた。

「超絶魔法教典」と書かれている。

「えっ！ これってもう伝わってないはずじゃ……」

「ある所にはあるんだよね。みんな知らないだけで」

超絶魔法。あまりの強力さに驚いた術者が、永久に封印した物だ。現代に伝わっていないはずだったのに、こんな所でお目にかかれるなんて。

「すごいすごい、ぜひ読ませて！」

「まあ、読んでも無駄だと思うけど」

「どうして？」

「超絶魔法って、使うのに才能が必要なんだ。しかも、それを持った人間は百万人に一人って言われてる」

へえ、確かに無駄っぽいね。私は普通の魔法すらまともに使えないのに。

お城の生活

私は超絶魔法の教典を受け取り、ぱらぱらとめくってみた。

目次を見て驚いた。周囲の空間ごと相手を弾き飛ばす魔法、遠く離れた地まで瞬間移動する魔法、大爆発を起こして周囲一帯を吹き飛ばす魔法など、とにかくすごい。

「こんなのが使えたら無敵だね」

「その代わり、超絶の才能を持つ者は普通の魔法をろくに使えないんだよ。まあ全然かまわないだろうけどね」

「ふーん。もしかしたら私にも才能があるかも」

「なわけないじゃん」

アレクサンダーはけらけら笑っている。ヤバい、またこのねずみを踏みたくなってきたよ。

「スカーレット。ここにはいろんな魔法の本があるから、よかったら読んでみなよ。超絶の教典に限らずね」

「あ、ありがとう」

私はその日から図書館に通って、魔法関係の本を読みあさった。それ以外の時間は王宮の中を散歩したり、貴族や兵士と立ち話をしたりして。

食べ物に関しては全く不自由しない。なんでも好きな物を好きなだけ食べる事ができる。その上、ガブリエル王子が私の給仕を努めてくれたり全身マッサージをしてくれたりして、もう天国だ。

こんな生活してていいのかなと疑問に思いながら自分の部屋で座っていると、彼が入ってきてこんな話をした。

「明日、魔法大会があるのです。スカーレット様もぜひ参加なさってください」

え、魔法大会……そう言えばそんなイベントがあるんだっけ。出ても恥をかくだけだと思っただけ。

「あの、私なんか出てても意味が……」

「そんな事はございません。スカーレット様なら優勝も可能だと思います」

ずいぶん買ってくれてるんだね、王子様。私の实力を知ってがっかりしなきゃいいけど。

魔法大会1

王子は私に紅茶を入れながら、魔法大会について説明してくれた。

「表向きは、優秀な魔術師が集まってその力を競い合うという物です。すでに予選は終わりましたので後は決勝ですね」

「表向き？」

「はい。本当の目的は別の所にあります。優秀な魔術師を集め、見所のある人間を召し抱えるという物です」

「大会では具体的にどんな事をするのですか？」

「特殊な魔法陣の中で戦っていただきます。その中でどれほど強力な魔法を使おうが、周囲に被害が及ぶ事はありません」

「え、そんな事したらどっちかが死んじゃうんじゃない？」

「いいえ。対戦は一对一で、双方が魔法陣の外に出た状態で行われます。中に自分の人形を置き、それを戦わせるわけです」

え。魔法で人形を動かすって、ものすごく難しいんですけど。

「あの、戦わせる事自体に魔力を消耗するんじゃない……」

「いいえ。参加者には特殊な力を封じた玉が渡されます。それを使えば、魔法陣の中の人形を自在に動かす事ができますし、自分の魔力を直接注ぎ込む事もできます」

はあ、なんだかすごい仕組みだね。

「要するに相手の人形を魔法で攻撃し、自分の人形を魔法で守ればいいのです。人間が命を落とすくらいダメージを受けると人形は自動的に消滅します。先にそうなった方が負けです」

「はあ、なるほど」

「出場なさいますよね？」

「えーと……」

私がこのこ出ていったが最後、相手にフルボッコにされて終わると思う。

そんな私の心も知らず、猫が余計な事を言った。

「出るに決まってるにゃあ。大魔法使いスカーレットに勝てる奴なんかないにゃ」

王子がそれを聞いて微笑む。

「ですよね、かしこまりました。ご活躍を楽しみにしております」

魔法大会2

王子が部屋から出ていった後、私はベッドに寝転びながら悩んでいた。

「あーあ、この生活もう終わりか。早かったなあ」

床に座った猫が首をかしげる。

「なんでそう思うにゃ？」

「当然の話じゃない。ガブリエル様は私を大魔法使いだと思ってるから歓待してくれてるんだよ。そうじゃない事がばれたら追い出されるに決まってるよ」

すると、猫はふふんと鼻を鳴らした。

「だったら大魔法使いになればいいにゃ」

「簡単に言ってくれるよね」

優れた魔術師になるには、まず才能がいる。魔力を上手にコントロールする事ができなければならないのだ。

他に大事なものは、きちんとした先生につく事。独学でやると変な癖がつくし、しかもそれに気付かない。そうなるとどこかに弱点が生まれ、敵の魔術師につけこまれる事になる。

「私には才能もないし、いい先生もないんだよ。こんなんで勝て

る方がおかしいよね」

「勝てるにゃ」

「はあ？」

この悪魔、でたらめを言っ
て私をからかうつもりなのかな。さっ
きのハムスターみたいに。

「超絶魔法を使えばいいんにゃよ」

なんの役にも立たないアドバイスをありがとう。

「王宮の大会に出てくるような連中を蹴散らすには、それしかないにゃ」

「アランさあ……アレクサンダーの言う事をちゃんと聞いてた？」

「うん。あのねずみが言った事は間違ってるにゃ」

私は沈黙した。元々知識が乏しいので、どこが間違ってるのかさ
っぱりわからない。

「ねずみは『百万人に一人ってレベルの才能が必要』とか言ったけ
ど、そんな物はないにゃ」

「じゃあ何がいるわけ？」

「あれを、人間が自分の力だけで使いこなすのは至難の技なんにゃ。
だから、天使や悪魔みたいに強大な魔力を持った存在が常に手伝う

必要があるんにゃ」

「はあ」

「運よく天使や悪魔に力を貸してもらえる人間の割合が、百万人に一人って話なんにゃ」

へえ。じゃあもう一つの条件はどうなんだろう。超絶を使える人は普通の魔法をろくに使えないとか。

「ついでに言うと、普通の魔法を使う事がうまい人間は超絶を使えないにゃ」

「なんで？」

「自分の体に強い魔力を帯びてしまっているから。さっき会った人魚やら貴族やら、あの辺はみんなそうにゃ。逆にスカーレットはその点で合格」

意味がわからない。強い魔法を使うのに、なんで魔力を帯びてちゃいけないんだろう。

「超絶に使う力と普通の魔法に使う力っていうのは完全に別物。通常の魔力を体に帯びた人間は、超絶に使う魔力を体に宿す事ができないんにゃ」

何が何やらこんがらかってきた。頭が悪くてごめんなさい。

「アラン、わかりやすく説明して」

「要するに、スカーレットは超絶を覚えて他の人間は使えないって事。わかったかにゃ？」

「う、うん」

魔法大会3

私は急いで図書館に行き、超絶魔法の教典を読み込んだ。すぐ近くで、アレクサンダーがちょこんと座ってこっちを見てる。

「君がそれを使えるとは思えないんだけどなあ」

「ふふん」

「え、もしかして使えるの？」

「かもねー」

アランが私を見つめながら言う。

「いろんな超絶があると思うけど、どれを使いたいんにゃ？」

「かつこよくて、きれいなのがいい！」

「強さとか気にしてないのかにゃ？」

「だって、すごいのはっかりじゃない。どれを使ったって勝てるよ」

「うーん……」

彼は首をかしげてる。何がそんなに気に入らないんだろう。

「ダメなの？」

「普通の魔法の中にも強力な物はいくらでもあるにゃ。甘く見ると足元をすくわれるかも」

「大丈夫だって！ アランは心配症だねえ」

猫は何か言いたげにしてたけど、結局黙っていた。

「とにかく、頼りにしてるからさ。ピンチになったらよろしくね」

「わかったにゃ」

翌日の朝、私とアランは王宮の庭へと向かった。

国王や王妃、貴族や兵士たちが集まっていて、その中央には直径十フィードくらいの魔法陣がある。

審判は誰がやるのかと思っていたら、なんとアレクサンダーらしい。私はタキシードを着込んだ彼に話しかけてみた。

「審判をやるハムスターなんて初めて見たよ」

「まあ、ボクみたいに優秀なのはなかなかいないからね」

うわ、エリートぶってるし。

「ねえ、他に誰が出るの？」

「見てのお楽しみだよ。今回は美人ばかりだなあ」

「ハムスターなのに、相手が美人かどうかなんてわかるの？」

「まあボクほどになると、人間の美醜もわかるのさ。尊敬してもいいよ」

うわ、めっちゃめっちゃ調子に乗ってるよ。おもしろいからおだててみよう。

「アレクサンダーすごい！ 天才！ かっこいい！」

彼は後ろ足で立ち上がり、精一杯胸を張っている。

「はっはっは！ ボクって最高だよね！」

「うん、人間だったら彼氏になってほしいくらい！」

「そうだろう、そうだろう！」

ハムスターはひとしきり高笑いをした後、いきなり言った。

「いくらおだてられても、審判は公平にやるからね」

「ちえっ」

魔法大会4

大会に参加するのは、選りすぐりの魔術師が八人。その中には人魚の女王クリスティーナや公爵令嬢エリザベートの姿も見える。

あ、なんかヤバイのがいる。あれってアンジェリカじゃないの！

私はあわてて王子にかけ寄った。

「ガブリエル様、ガブリエル様！」

「どうなさいました？」

「なんであの人がいるんですか！」

「彼女も予選を勝ち抜いてきたのですよ。何か問題でも？」

「え。だって、あんな危険人物……」

「有能である事には違いありません。ラウルフィッツ伯爵家のご令嬢で、身元も確かですし」

え、あんな性格悪い女の子が伯爵家の令嬢って……世も末だね。

「でも、あの人は魔香を」

「二度と使わないよう申し入れております」

「そ、そうですか」

そのとき私は、周囲からの視線を感じた。クリスティーナやエリザベート、アンジェリカがこちらを見つめている。

三人が私を見る目は限りなく冷たい。しかも彼女たちだけでなく、他の女性たちにもらみつけてくる。

私はすっかりすくみ上がってしまった。王子と言葉を交わしただけでこれでは、恋人同士になったら何をされるかわからない。

「はわわわ、はわわわ」

「どうしたんにゃ、スカーレット？」

「アラン、ヤバイよ。ここにいる女の子全員を敵に回したみたい」

彼がため息をついて言う。

「何を今さら……当たり前前の話にゃ。ここにいるのは身分が高い上に才色兼備の女性ばかり。そんな連中を差し置いてド平民でいいとこなしのスカーレットが王子に近づいたら、嫉妬の炎で焼き殺されて当然にゃ」

「ド平民で……」

なんかひどい言われようだけど、一理ある。彼女たちから見れば私は虫けら同然だ。

魔法大会5

ひたすらおろおろしていると、アレクサンダーがちよこちよこ歩いてきて言った。

「スカーレットは一試合目だよ。準備はいい？」

「えっ！」

私はぶるぶる震えながら、アランを抱えて魔法陣に近づいた。王様を始めとする宮廷の人たちや、招待された貴族たちの視線が集まる。

「あうあう……」

アランが私を見上げて言う。

「落ち着くにゃ、超絶があればきつと勝てるにゃ」

私はアレクサンダーから光る玉を受け取った。途端に、自分そっくりの人形が魔法陣の中に現れる。

「す、すごい……」

さすが魔法大国、なんでもありだ。

ところで対戦相手は誰だろう。向こう側を見ると、立っていたのはクリスティーナだった。

魔法陣の中で偽物の二人が対峙する。やがて彼女の人形が微笑んだ。

「スカーレット様、お手柔らかにお願い致します」

「こ、こちらこそお願いします……って、その足は一体？」

人魚であるはずなのに、彼女は二本足で立っていた。

ふわっとした内巻きカールの金髪、白い肌に赤い瞳、すっきりした顔と体。

着ているのはベアトップでマーメイドライン、チェリーピンクのドレスだ。黄金のティアラやイヤリング、腕輪、白いハイヒールも身につけている。

「私たちの種族は変身できるのです。陸上を歩き回るには、二本足の方が便利ですから」

「へえ！　すごいですね」

どこからどう見てもれっきとした人間だ。人魚だと言われなければ誰も気付かないだろう。

魔法陣の外からアレクサンダーが言う。

「二人とも準備はいい？」

クリスティーナ人形と私の人形が答える。

「いつでもよろしくてよ」

「準備オツケーです！」

魔法大会6

アレクサンダーが両前足を振り上げて叫ぶ。

「第一試合、クリスティーナ対スカーレット！ 始め！」

自分の力だけじゃ勝ち目はない。私は抱きかかえてるアランに小声で言った。

「よろしくね、あなただけが頼りなんだから」

「にやにやつ、了解！ おかげで嫉妬パワー満たんにや！」

「何それ」

「ボクは人間の悪意を取り込んで力を得る事ができるにや。会場の子たちの嫉妬が役に立ってくれるにや」

ああ、そう言えばそんな能力があるんだっけ。

「私ってそこまで嫉妬されてるわけ？」

「うん、ものすごいにや。みんなの心の声を聞いてみるかにや？」

「いい……なんか怖いし。それよりも勝負が始まってるよ」

やがて、偽クリスティーナが私の人形に向かって微笑んだ。

「お話は終わりましたか？」

「あ、はい。すみません」

「そろそろ始めてもよろしくて？」

「は、はいっ」

その直後、偽クリスティーナの瞳が真っ赤に光り輝いた。う、ヤバい。なんか強烈な魔法が来る。

彼女の体がまばゆい光を放ち、そのブロンドの髪が浮き上がっていく。

「天界を統べる雷帝よ、我が求めに応え哀れなる木偶を灰燼にせよ！」

ひ、ひいいい。ヤバイヤバイ、絶対ヤバイよ！

「ちよっとアラン、話が違うじゃない！ あの人、明らかに神の力を借りてるよ！」

「え、話って？」

「天使や悪魔の力を借りる事ができるのは百万人に一人しかないんじゃないの？ あの人はずいぶんか神の力を借りてるじゃないの！」

「いんや、何も違ってないにゃ」

「はあ？」

この猫ときたら、私をだまして楽しんでるんだろうか。何せ悪魔だし。

「恒常に力を借りる事ができるのが百万人に一人って言っただけで、一時的に借りるなら誰でもできるにゃ」

「ええー！」

「それに、天使や悪魔に関する話はしたけど神の話はしてないにゃ」

「えええー！」

もうショックのあまり倒れそうだ。魔法陣の中の人形も、影響されてふらついてる。

「はわわわ……相手が神じゃ勝ち目ないじゃん！」

涙目になっている私の人形を見て、偽クリスティーナが微笑む。その髪の毛がいよいよ高く浮き上がり、激しく波打つ。

「ふふっ……今さら後悔しても遅くてよ。私のガブリエルに近づく不届き者は、一人残らず排除してあげる！」

魔法大会7

もう頭が混乱して、何をどうしていいのかわからない。

「わああ、もう無理！ 勝てっこないよ！」

「落ち着くにゃ、スカーレット」

「落ち着いたところでどうにもならないでしょ！」

「いいから。彼女は神になったわけじゃない。その力を一時的に、ひとかけらだけ借りているにすぎないんにゃ。きちんと対処すればなんとかなるから」

「ふえええー！」

対処って、どうすればいいんでしょうか？

はっ、そろそろ魔法が来ちゃうよ！

クリスティーナが余裕の笑みを浮かべながら言う。

「スカーレット、身の程を知りなさい。あなたなど私の足元にも及ばないのだから。今後ガブリエルに近づいたら、あなた本人に魔法をお見舞いするよ」

ちょ、めっちゃ見下されてる。確かにクリスティーナは美人だし身分は高いし強い魔法も使えるみたいだけど、この上から目線の態度はすごいムカつく。

「死にたくなければ王子様から離れろと、こう言うわけですか？」

「ええ」

「怖い女王様ですね、他人を脅迫するなんて」

「だったら何？」

「そんな脅しには屈しません！」

「ふふっ、威勢がよろしい事。これを見てもまだそんな事が言えるかしら？」

彼女の人形が目を見開いて叫ぶ。

「ライトニングストーム！」

途端に魔法陣の中をすさまじい電光が駆け巡った。それらは私の人形を直撃し、雷が落ちたような轟音が響き渡る。

「きゃああああーっ！」

私はびっくりして悲鳴を上げた。たぶん人形は黒コゲだ。

……と思ったら無傷だった。天使を思わせる真っ白な翼がその体を包み込んでいる。

アランがため息をついて言う。

「セラフィック・ウイングを発動しておいてよかったにや。一歩遅かったら消し炭になってるところにや」

魔法大会 8

私はほっとすると同時に、クリスティーナのすさまじい強さに驚いた。アランがいなかったら瞬殺されてるところだ。

「やるわね、スカーレット。それにしてもその翼……天使にでもなつたつもり？」

「え、その……ビジュアル的にいいなーと思って」

「そんな理由で魔法を選ぶなんて、対戦相手を馬鹿にするにもほどがあるよ。今度こそ黒こげにしてあげる！」

誰もが見惚れるほど美しい人魚の女王の口から、こんな過激な言葉が飛び出すのが信じられない。あと、その魔法の威力はもっと信じられない。

彼女の人形は再び詠唱を始めた。私の人形の周囲をすさまじい量の電光が走る。

「サンダーボルト・エクストリーム！」

魔法陣の表面が電撃で埋め尽くされる直前、偽物の私は空中に舞い上がっていた。天使の翼がまばゆい光を放ち、その羽根がきらきらと地上に降り注ぐ。

周囲の女の子たちが声を上げている。

「すごい、めっちゃめっちゃきれい！」

「あの人、もしかして本物の天使？」

「いいなあー、かっこいい。私もあんな風になりたいよ！」

悪くない気分だけど、ひたってる場合じゃない。早くしないと魔力が尽きてしまう。

私の人形は地表に向かって両手を開き、詠唱を始めた。

「汝を裁くは高潔なる天使、汝を撃つは凄絶なる光の雨！　スターダスト・レイン！」

魔法陣の上空に巨大な光の輪ができたかと思うと、そこから無数の光の筋が降り注ぐ。

偽クリスティーナは半透明の壁を作って防ごうとしたが、光はそれを粉碎して彼女を直撃した。人形の体は激しく叩きつけられ、衝撃でバウンドしている。

「き、きゃあああーっ！」

やがて人形は消滅した。ダメージが致死量に達したらしい。

魔法陣の近くで呆然としていたアレクサンダーが、はっとして口を開く。

「し……勝者スカーレット！」

観客はしばらく沈黙していたが、やがて盛大な拍手を始めた。私

を見る目がさつきと全然違う。なんか神様扱いされてるみたいだ。

本物のクリスティーナが近寄ってきて、おずおずと言う。

「……数々の無礼、どうかお許しください。天界からいらっしゃった方とは露知らず、本当に申し訳ございませんでした」

人魚の女王はその場にひれ伏して涙を流している。すぐ横には侍女たちが並び、私に祈りを捧げながら許しを乞う。

「天使様、どうか我が主人をお許しください」

「お慈悲を……どうぞお慈悲を……」

私はあまりの出来事におろおろしてしまった。一国の女王に頭を下げられて、ふんぞり返っていられるほど神経が太くない。

「ど、どうかお立ちください。私はそんな大層な者ではありません」

「いいえ、あなた様のお力、しかと拝見しました。明らかに天使です。万が一違ったとしても、それと同等の存在である事は紛れもない事実です」

私は困ってしまった。防御魔法ごと粉碎するほどの魔力を見せてけられたら、誰だって人外の実在だと思うだろう。しかもビジュアル的には天使そのものだし。

観客の中にも、私に祈りを捧げたりひれ伏している人たちがいる。これはもう、いくら否定しても無駄だ。

着飾った貴族の女の子たちが口々に言う。

「相手が天使じゃしょうがないよね……」

「ガブリエル様がイケメンすぎるから、ついに天使まで呼び寄せちゃったんだね」

「天使と王子のカップルってすごくない？」

はあ、もうどこでもいいや。なんとも思ってください。

あ、それより女王をなんとかしないと。まだひれ伏してるし。

「クリスティーナ様、どうかお顔を上げてください。別に怒ってませんから……」

「あ、ありがとうございます！」

彼女は美しい顔に笑みを浮かべ、侍女たちが胸を撫で下ろす。

「あの、スカーレット様。私のような下賤の者がこんな事を申し上げまするのはなんです……」

「はい？」

「今後は、私と仲良くしていただけないでしょうか。もちろん、ガブリエル王子はあなた様にお譲りします。どうかお願い致します」

魔法大会9

クリスティーナは私の手を握りしめ、哀願するような目でじっと見つめてくる。うう、そんな顔しないでください。

「えっと、私みたいな人間でよければ喜んで……」

「ありがとうございます、スカーレット様。お近づきになる事ができて光栄です！」

なんか大変な事になってしまった。これからずっと天使扱いだ。

アランに視線を移すと、彼は知らんぷりをしてる。相変わらず冷たい猫だね。

しばらくすると他の試合が終わり、また私の番が回ってきた。今度の相手はエリザベートだ。

歳は十七、八。銀色で外巻きカールのセミロングヘア、白い肌、紫色の瞳。ぱっちりした目に整った輪郭、ほっそりした体。

着ているのはベアトップでスレンダーラインのカクテルドレス。色はエメラルドグリーン。他に銀のネックレスと腕輪も身につけている。

彼女は近づいてきて、うやうやしく頭を下げた。

「あなた様が天界の方だとは存じませんでした。でも、試合は試合ですから全力でいかせていただきます」

「どうぞ。あと、私は天使じゃないです」

「そうおっしゃられても、天使にしか見えないので仕方ありません」
うーん、やっぱり他の魔法にしとこうかな。

そのとき、アレクサンダーがちよこちよこ歩いてきた。

「そろそろ始めるよ、いい？」

「うん。あなたは態度が変わらないんだね。ほっとした」

「まあねー、僕は世界一優秀なねずみだから。相手が誰だろうが関係ないね」

この子が極端な自信家でよかったよ。

エリザベートも声をかけてくる。

「そろそろ始めてよろしいでしょうか？」

「あ、はい。ごめんなさい」

魔法陣の近くに歩いていって精神を集中すると、中に私の人形が現れた。その向こうにはエリザベートの人形が立っている。

アレクサンダーが両前足を振り上げて叫ぶ。

「スカーレット対エリザベート、始め！」

魔法大会10

エリザベートの人形が目を見開く。

「冷厳なる氷の女帝よ、かの者を永遠の牢獄へといざなえ！」

彼女の紫色の瞳が輝き、銀色の髪が浮き上がった。さらに、その両手が青白い光を発している。

「エターナル・プリズン！」

偽エリザが叫んだ直後、私の人形は巨大な氷の中に閉じ込められていた。手足を動かそうとしたけど、ぴくりとも動かない。

や、ヤバい。このままだと一方的にフルボッコだ。

偽エリザが目を細め、ピンクベージュの唇をゆがめて笑う。

「ふふっ……天使の氷漬け、なんて美しいんでしょう。そのまま永久に眠らせてあげる」

彼女はそう言った後、目を細めて王子を見つめながら人差し指をねっとりとなめた。

な、なんかエロい。とてつもなくやらしい。単に指をなめただけなのに、どぎつい色香が伝わってくる。

近くで見っていた、アンジェリカ伯爵令嬢が目を吊り上げて言い放つ。

「不潔で下品な振る舞いね。公爵令嬢とは思えないわ。汚らしい」

その声を聞き付けた本物のエリザが、アンジェリカをにらみつけた。両者の間に火花が散る。

「私の振る舞いに何か文句でも？」

「公衆の面前で男性を誘惑するなど、貴族のする事とは思えません」

「公衆の面前で魔香を使ってガブリエル様を惑わせ、連れ去ろうとした痴れ者がよく言えたものね。呆れるわ」

「そ、それは……」

さすがのアンジェリカも、真っ青になってうつむいている。エリザベートがそれを見て勝ち誇ったように笑う。

「私がしたのはただのアピール、あなたがしたのは立派な誘拐です。本来なら死罪にされてもおかしくありませんよ。よくおめおめここに顔を出せましたね？」

アンジェリカは冷たい言葉に打ちのめされ、縮こまりながら黙り込んでしまった。これで公爵令嬢の独壇場だ。

「会場の皆様、これより私が天使を仕留めてご覧に入れます！」

周囲から歓声が上がる中、彼女は微笑みながらガブリエル様を見つめている。「こんなすごい私を見て！」と言わんばかりだ。ああムカつく。

とにかく、このエロお嬢様に負けたくない。あんな最低なアピールをするような人に負けるもんか。

「アラン、どうすればいい？ 教えて！」

「まずは魔力を集中するにや。それから……」

私は彼の話聞き、大きくうなずいた。

「わかった、やってみる！」

魔法大会11

私は心を落ち着け、精神を集中した。同時に自分の人形が光輝いていく。

偽エリザベートがそれを見て、目を吊り上げながら言う。

「絶対に逃がさない……ガブリエル様は私の物。あなたを倒して彼を手に入れてみせる！」

いつの間にかその手には銀の弓が握られている。

「アルテミスの弓よ、我に力を！」

彼女は弓を引き絞り、私の人形に向かって放った。矢が閃光と化して飛んでくる。

「あはは、あっははは！ ごめんあそばせ！」

ほぼ同時に、私の人形は氷を粉碎していた。さらに間髪入れず両手を突き出す。

「鏡よ！」

次の瞬間、巨大な鏡がその前に現れた。エリザ人形が映っている。矢は勢いよく彼女の映像に突き刺さった。

偽エリザが鼻を鳴らして言う。

「なんとか防いだみたいね、でも次は……」

「次はないよ」

「え……うつ？」

彼女が胸を押さえて苦しみだす。

「あつ、ああつ……くうつ、ああああつ……」

震えながら片手を突き出す彼女を見ながら、私の人形は目を細めた。

「超絶魔法ミラーシェイド。鏡に映った者を攻撃すると、そのまま本人にダメージが与えられる」

「く、あつ……おのれ、よくも……うああああーっ！」

エリザ人形は断末魔の悲鳴を上げて消滅した。途端に周囲から歓声が湧き起こる。

「なんという強さ……やはり本物の天使だ！」

「すごい、強すぎるよ！」

「あの方はこの国を救うために、天から遣わされたに違いない！」

なんかいろいろ誤解されてるけど、持ち上げられるのは悪くない。

「アラン、ありがとう。おかげで勝てたよ」

「気にしなくていいにや。自分のためにやってるだけにやから」

「え、自分のため？」

「いや、なんでもにやい」

魔法大会12

今回もなんとか勝てた。ほっとしている私の所に、エリザベートが寄ってきて言う。

「お見事です。私の完敗です」

「ありがとうございます、本当に危ない所でした。エリザベート様は強いですね」

「いいえ、あなたには及びません。でも……」

「でも？」

「ガブリエル様を渡すつもりはありません。あの方は私の物です。それだけはお忘れなく」

「どうして、そこまで彼にこだわるんですか？ あなたなら他にいくらでも……」

彼女は目を細め、ふっと息を吐いた。

「公爵令嬢ともなると、市井の男性を捕まえて結婚というわけにもまいいりません。それなりの家格の方でない」と

「それなら貴族の中から選ばよろしいのでは？」

「いいえ、そこいらの貴族ではとても……それに彼とは幼なじみです。お互い気心が知れていますし、一緒にいると安らげるのです」

「でも、それだと刺激がないんじゃない？」

「まあ確かにその通りですが……家格は最高、眉目秀麗、性格も温厚。私にとってこれほどの相手は他におりませんので」

「そうですか……」

「はい。ですから、相手が天使だからと言って引くつもりはありません」

「わかりました。でも、私に危害を加えようとするのはおやめくださいね」

「は、はい……申しわけございませんでした……」

彼女は真っ青になりながらぺこぺこ頭を下げている。しっかり釘を刺しておかないと危なくてしょうがない。

さて、いよいよ決勝だ。相手はアンジェリカ伯爵令嬢。うう、できれば二度と会いたくなかったのに。

魔法陣の前に立つと、中に私の人形が現れた。その向こうには彼女の人形が立っている。

見た目は二十歳くらい。中肉中背、ストレートロングの金髪、赤い瞳に真っ白な肌。切れ長の目にすっきりした輪郭、ほっそりした体にすらりと長い手足。

着ているのはプリンセスラインのカクテルドレスで、頭に羽飾り

を着けて足にハイヒールを履いてる。色は全部黒だ。なんだかカラ
スみたい……とか言ったら殺されそうなので黙っておこう。

偽アンジェリカは、私の人形を見て口角を吊り上げた。

「あら、またあなたなの？　よっぽど私と縁があるのね」

伯爵令嬢の力

うーん、こんな危険人物との縁なんかいない。

「スカーレット、私はあなたが天使だろうが悪魔だろうがどうでもいいの。ただ……」

「ただ？」

「私の邪魔をする者は、誰であろうが叩き潰す。それだけだよ」

彼女はそう言い、にかつと笑った。とんでもない人だ。できれば関わりたくなかった。

アレクサンダーが両前足を振り上げて叫ぶ。

「アンジェリカ対スカーレット、始め！」

彼女の人形の赤い瞳が輝いた。さらに、その全身が紫色の光を発する。

「地獄の大公よ、我に力を！」

偽アンジェリカが私の人形に向かって両手を開いた。その前に真っ黒な玉が現れ、みるみるうちに巨大化していく。

「汝を待つのは終わりになき厄災、そこにあるのは破滅と絶望のみと知れ！」

黒い球がどんどん大きくなり、魔法陣全体を包み込む。

「ディストラクション・ダークネス！」

次の瞬間、私の人形をすさまじい衝撃が次々と襲った。体が地面に叩きつけられ、さらにはね上がり、再び落ちて叩きつけられる。

ちょ、とんでもない威力だ。セラフィック・ウイングで防御してるのに、まるで効果がない。

「っ、強っ……」

思わずつぶやいた私を見て、本物のアンジェリカが笑う。

「こんな物で驚いてもらっちゃ困るね。お楽しみはこれからだよ」

彼女が右手を振り上げると、私の人形に黒い縄が巻き付いた。さらに、その周りに黒い火柱が上がる。

「己の無力さを悔やみながら、まがまがしき炎に焼かれるがいい！
イビルスピリット・デスペナルティ！」

このままだと、焼きスカーレットの出来上がりだ。もう黙ってられない。

「アラン、行くよ！」

「合点！」

私の人形は目を見開き、すさまじい光を放った。一瞬で黒い縄を

引き契り、白い翼を煌めかせて空へ舞い上がる。

さあ、今度はこっちの番だ。

「汝を裁くは天空からの使徒、汝を滅するは無限の光！ 邪なる者の還る場所は虚無の深淵のみと知るべし！」

スカーレット人形の周囲に、無数の真っ白な光球が現れた。それらは彼女を中心にぐるぐる回ったかと思うと、すさまじい勢いで地上を目掛けて落下していく。

「インフィニティ・ジャッジメント！」

光球は容赦なくアンジェリカ人形を直撃し、大爆発を起こした。爆炎で彼女の姿が見えないほどだ。

きっとこれで終わりだろう。ああスッキリした。

招かれざる客

ところが、偽アンジェリカはふらふらになりながらも立ち上がった。服があちこち破けて白い肌が露出している。

「はあっ、はあっ……よくも、よくもこの私を……」

その赤い瞳が光を放つ。まだ戦う気だ。私は彼女の執念に鳥肌が立った。

こっちも、さっき大技をまともに受けたせいで被害がすごい。真紅のカクテルドレスはボロボロだし、靴はどこかに消えてしまっている。しかも体中が傷だらけだ。

お互い人形だからいいけど、これが本人だったらと思うとぞっとする。

とにかく、決着をつけなければならない。この人は心底氣に入らないし、ここで一度ぎゃふんと言わせてやろう。

……と思ったその時、上空から若い男性の声がした。

「はっははは、はーっははは！」

皆がぎょっとして見上げると、そこには一人の男性がいた。歳は十八歳前後。銀色の長髪に白い肌、赤い瞳に彫りの深い顔。漆黒の甲冑を身につけ、紫色の竜にまたがっている。

「茶番かと思っていたが、とんでもない。筋がいいのが二人もいる

じゃないか」

ガブリエル王子が進み出て彼をにらみつける。

「アレックス、何をしに来たのです！」

「ふっ、女装王子か。お前などに用はない」

アレックスは地上に向かって右手を広げた。その直後、私の体を銀色の縄が絡みつく。

「えっ！」

ろくに抵抗もできないまま、私はアランごと縛られてしまった。人形じゃなくて本人の方だ。しかも、体がどんどん浮き上がっていく。

「ちょ、なっ……」

「にゃにゃー！」

同時に、アンジェリカも同じ目にあっていた。

「ぶ、無礼な……隣国の王子とはいえ、私にこのような……」

え、王子って……あれが？

そのとき、ガブリエル王子が両手を天に向かって掲げた。直後に輝く弓矢が現れ、彼はそれを引き絞ってアレックスに狙いを定める。

「ただちに二人を解放しなさい。拒むなら容赦なく撃ちます！」

「くくっ、それはなんだ？ まさかおどしているつもりなのか？」

アレックスが薄笑いを浮かべながら右手を一閃させると、ガブリエルの弓は粉々に砕けてしまった。

「くっ……」

「ふははは、ザコが。身の程を知るがいい！」

私とアンジェリカは、縛られたまま竜の背中に載せられてしまった。アレックスが地上の人々を見下ろしながら言う。

「こうして土産をもらった事だし、私も返礼をせねばなるまいな。遠慮なく受け取れ」

彼は地上に向かって両手を開いた。とたんにオレンジ色の光球が現れ、どんどん巨大化して城を呑み込んでいく。

「さらばだ、ローゼンハイムの豚どもよ！」

アレックスが言い終わるや否や、光球は大爆発を起こした。城全体が炎に包まれていく。私は思わず叫んだ。

「ガブリエル様、ガブリエル様ああっ！」

冷酷なる王子1

アレックスは隣国ヴィクタリスに向かって竜を駆る。私とアラン、アンジェリカを共に乗せて。

これはきつと夢なんじゃないだろうか。私は王宮になんか行っていないし、魔法大会にも出てない。

当然、こんな冷酷非情な王子にも会っていないのだ。

……なのに、いくら時間がたっても状況は変わらない。

アンジェリカをチラ見すると、ただでさえ白い顔がさらに白くなっていた。体もぶるぶる震えている。

「アンジェリカさん……これ、何かの間違いですよね？」

彼女は目を細め、ゆっくりと首を振った。その瞳には涙があふれている。

「誰がなんと言おうがこれは現実よ。本当にくやしいけど、どうにもならないわ」

アレックスがそれを聞き、振り返って言う。

「そう悲観するな。悪いようにはしない」

私はむっとした。ガブリエル様を城ごと吹き飛ばしておいて、よくそんな事を言えるものだ。

「悪いようにはしない？　もうしているではないですか。あなたはガブリエル様の命を奪い、私たちを誘拐し……」

「黙れ」

彼の切れ長の目がずっと細くなったのを見て、私は硬直した。有無を言わさない迫力がある。

「お前たちはこれから、俺の手足となって働け。俺はいずれヴィクタリスの王になる。その暁には……」

「その暁には？」

「お前たちを王妃にしてやる」

私は目をしばたいた。王妃って二人もなれる物なんだろうか。

「あの、二人を同時に？」

「そうだ。ローゼンハイムはどうだか知らんが、ヴィクタリスでは複数の王妃を迎える事が許されている。まあ仮に許されていなかったとしても、俺が法を改変すれば済む話だがな」

ここまで傍若無人な人間は見た事がない。いきなり敵国に突入してきて王城を攻撃し、中の人間を誘拐して王妃に迎えると言う。しかも二人。

「あの……なんで私たちを？」

「強いからだ」

「でしたら、部下として迎えば……」

「上司と部下では、簡単に裏切られる」

え。王妃に迎えたって、裏切る時は裏切るんじゃないかな。

私の心を見透かした様に、彼が微笑みながら言う。

「大国の王妃になってしまえば、なかなかその身分を捨てようとは思わないだろう。好きなだけぜいたくができるのだからな。それに……」

「それに？」

「結婚して子を成してしまえば、ある程度は裏切りにくくなるだろう」

冷酷なる王子2

結婚して子どもを作れば裏切りにくくなる、ねえ。

どうなんだろ。私は旦那様が大嫌いだったら離婚するか、子どもをつれて逃げるけど。

またアンジェリカをチラ見すると、彼女はすっかりしょげ返っている。

「アンジェリカさん、大丈夫ですか？」

「ううん、もう泣きたいよ」

私も泣きたくなくなってきた。どうしてこんな事になってしまったんだろう。

黙り込んでいると、アレックスが私の髪の毛をくしゃくしゃと撫でた。ちょ、さわらないでください。

「そんな暗い顔をするな。未来の王妃だぞ？ いい身分じゃないか」

「あなたみたいに冷酷な人と結婚して、幸せになれるとは思えませんが」

「はっきり言う奴だな」

「ええ、あなたは敵ですから」

すると、王子は私を抱き寄せた。彫りが深く端正な顔が近づいてくる。

「なっ……放して！ 放してください！」

私は必死に抵抗したが、竜の背中の上では逃げられない。

「そう邪険にするな、未来の王妃よ。黙って俺についてこい」

「やっ……」

彼は目を閉じ、私にキスをした。なんて強引な男なんだろう。信じられない。

「な、何を……」

「俺の気持ちだ、受け取れ」

ガブリエルと言いアレックスと言い、なぜか私は王子様にキスをされる運命にあるらしい。

「そろそろヴィクタリスに入るぞ」

眼下には、一面の小麦畑が広がっていた。農具を担いだ男性たちがちらほら見える。彼らの表情は明るい。

私はキスされたショックからしばらく立ち直れなかったが、やがて気を取り直して王子に話しかけた。

「アレックス様、伺ってよろしいですか？」

「ああ」

「ヴィクトリスとは、どういう国なのでしょうか」

彼が私の目を見つめ、話し始める。

「この世界には、大きく分けて三つの大陸がある。エルグラント、アレシア、ミレトスだ」

「はい」

「ヴィクトリスは、エルグラント大陸の約三分の二を領有している。残った三分の一はローゼンハイムを始めとする小国群だ」

「はい」

「総人口は現在調査中なのではっきりとした事は言えないが、数百万といったレベルだろう。貧富の差はあるものの、貧しい者たちが食うに困るという事はない。最低限の生活は保障されているからな」

「一言で言って、ヴィクトリスは豊かな国ですか？ 貧しい国ですか？」

「豊かな国だ」

私は一つ疑問を持った。貧しい国が肥沃な土地を求めて隣国に攻め込むのはまだわかるが、なんの不自由もない国がどうして戦争を引き起こそうとするのだろうか。

「なぜ、ヴィクタリスはローゼンハイムを攻めようとするのですか？」

ヴィクタリスの城

アレックス王子が微笑みながら言う。

「ヴィクタリスを世界一の大国にするためだ」

「どうしてその必要があるのですか？」

「それが実現すれば、この世界を思うがままに動かせる。すばらしい話だと思わないか？」

私は幸せになりたいとは思うけど、世界をどうしようなんて考えた事もない。

でも無理に否定して彼を怒らせるのも怖いので、あいまいにうなずいておいた。

「そろそろ王城が見えてきたぞ」

前方を見ると、城壁に囲まれた巨大な都市が見えてきた。その真ん中辺りに、紫色をした建物が見える。

「あれが王城ですか。紫色って珍しいですね」

「ああ、まあな。すべて紫水晶でできているのだ」

「それだけの量を一体どこから？」

「魔法で作ったんだよ」

私は絶句した。ヴィクタリスの魔法のレベルはたいした事ないって聞いてたけど、全然そんな事はない。

「すごい……」

四角い城壁も、中にある尖塔も、紫色に輝いている。

私たちは王城の庭に舞い下りた。周囲には銀色の兜と甲冑を着込んだ兵士たちがずらりと並び、こちらに敬礼している。

やがて、兵士の代表らしき精悍な男性が声をかけてきた。歳は二十歳くらいだ。

「お帰りなさいませ！　ご無事で何よりです！」

王子が大きくうなずき、口を開く。

「ローゼンハイムの王族どもを吹き飛ばしてやったぞ。これであの弱小国も終わりだ」

「さすがはアレックス様、お見事です」

「この二人は未来の王妃だ。以後丁重に扱え」

「はっ！」

王子は先に立って歩きだした。私たちもあわてて後に続く。体を縛り付けていた縄はいつの間にか消えている。

彼は、私を一つの部屋に導き入れて言った。

「まず、もう一人の女の方に話がある。お前はここで待っていてくれ」

「は、はい」

部屋は広かった。成人男性の身長を一フィードとすると、十フィード四方はありそうだ。天井も壁も床も、すべてが紫水晶でできている。

その中には様々な家具があった。天蓋の付いたベッド、テーブルに椅子、洋服箆笥、鏡台、本棚。これらもやっぱり紫水晶だ。

アランを床に降ろしてやると、彼はしみじみと言った。

「ツルツルして歩きにくいじゃあ」

欲望のワイン

私は紫水晶の椅子に座りながら、アランをぼーっと見つめていた。一体これから、どうしたらいいんだろう。

「スカーレット、生きてるかにゃ？」

「え？ あ、うん。生きてるよ」

「どうするにゃ？ 逃げるなら今にゃ」

そうだよ。でも、アレックス王子にちょっとだけ興味があるなあ。

「もう少しようすを見てみるよ」

「そんな事言ってる、今に逃げられなくなるにゃ」

「おどかさないでよ、もう！」

猫と話をしていると、ドアをノックする音がした。

「はい、どうぞ」

「失礼する」

入ってきたのはアレックス王子だ。ワイングラスが乗ったトレイを持ってる。

「これは、我が国で作られた中で最高級のワインだ。ぜひ飲んでみてくれ」

「私、お酒は呑めません」

「少しくらいいいけるだろう？」

私は目を細めて彼をにらみつけた。この王子、私を酔わせていけない事をするつもりじゃないだろうか。

「そんな怖い顔をするな。別に取って食おうというわけじゃない」

「信用できません！」

「わかったわかった。ではせめて、一口だけ飲んでみてくれないか。本当に美味なのだ」

もう、しつこいなあ。

「わかりました、一口だけですよ」

「ああ」

王子が微笑しながらグラスを差し出す。私はそれを受け取り、おそるおそる口をつけた。

少しか口に含んでみたけど、特に変わった感じはない。

大丈夫そうだね。よし、飲んでみよう。

思いきって飲み込んだあと、異変が起きた。体が熱い。

「こ、これは……」

「心配するな、別に毒じゃない」

「ではなんですか！ 飲んですぐに効果が現れるなんて、一体……」

「そう怒るな。まず落ち着……」

彼の言葉が終わらないうちに、私は倒れ伏してしまった。

再び目を覚ました時、私はベッドで横になっていた。

近くにいたアランがしっぽを揺らしながら言う。

「ずいぶん寝てたにゃあ」

「うう、頭痛い……はっ！ あの王子、私に何かしたの？」

「おまいさんをベッドに寝かせて、その後すぐ出ていったにゃ」

よかった、特に変な事はされてない。

「……って、スカーレット！」

「え？」

「鏡を見ってみるにゃ！」

え、何がどうなったの。怖いんだけど。

再び変身

私は鏡台の前に立ち、自分の姿を確認した。

髪はウェーブのかかった金色のロング、真っ白な肌に紫色の瞳。

ぱっちりした目にローズピンクの唇、長いまつ毛にすっきりした輪郭。

胸は谷間ができるほど大きいし、腰はきゅっとくびれてる。お尻の形も整ってるし足も長い。

明らかに前の私とは別人だ。まあ、多少面影はあるけど。

「な、何これ？　どうなってるの？」

「たぶん、さっきのワインの効果だにゃあ」

「って事は、アレックス王子のしわざ？」

「だろーにゃ」

私は呆然とその場に立ち尽くしていた。本人に断りもなくこんな事をするなんて信じられない。

「どうしたにゃ？」

「ひどくない？　そりゃ、きれいになったのは嬉しいけど……」

その時、私の口が勝手にしゃべりだした。

「スカーレット」

え、何。そんな事言うつもりなかったのに。

私は見たくもないのに、なぜか鏡を見ていた。また口が勝手にしゃべりだす。

「初めまして。私はスカーレットの中にある欲望。普段、あなたが意志の力で押さえつけている物よ」

え、どうなってるの。体がまるで言う事を聞かない。

「今回、あのワインの力でこうしてあなたとお話する事ができたわ。本当に嬉しい限りよ」

じ、自分の欲望なんかと話したくないし。

そう思っていると、私の顔が勝手に微笑んだ。

「スカーレット。このヴィクトリスで、欲望のままに生きなさい。誰にも気兼ねする事なんかないわ」

え、え？

「じゃあね、あなたには期待してるから。うふふふ、あっははは！」

な、何を期待してるんですかー！

しばらくすると、自由に動けるようになった。でも違う、何かが

違う。

私は鏡の前で薄笑いを浮かべた。すごくきれいだけど、心底ぞつとするような冷たい笑顔だ。

「ふふ……私の時代が来たよ。もう、単なる貧乏な農民なんかじゃない。世界中のイケメンをひざまずかせてあげるわ!」

アランが目を見開きながら言う。

「ど、どうしたんにゃ?」

「本当の私が顔を出したただけの話だよ。アラン、これからよろしくね」

新生スカーレット

私は、変わった。

見た目も内面も。美人になったのは確かだけど、性格が果てしなくヤバイ。

心の中で、残り少ない理性が訴える。

「スカーレット、ダメ！ このままじゃあなたは悪女まっしぐらだよ！」

やがてその声は小さくなっていき、最後には消えた。もう理性的なんて物に、私を止める事などできはしない。

椅子に座って残りのワインを飲んでいると、アレックス王子が部屋に入ってきた。その表情は晴々としている。

「おお、スカーレット。見違えたぞ！ ここまで美しくなるとはな！」

「ありがとうございます。アレックス様のおかげです」

深々と頭を下げると、彼は私の手を取って言った。

「強大な魔力、他の追随をゆるさぬ美貌。私の妻に迎えるのにふさわしい」

「ふふ、光栄です」

せいぜい今は喜んでいればいいよ。いずれ、あなたは私の前にひれ伏す事になるんだから。

「それでだな、スカーレット。一つ頼みがあるのだが」

「なんなりとお申しつけください」

「ここヴィクタリスには、我々王家の人間に逆らう一派が存在する。サンタリア教団と呼ばれる宗教団体だ。信者は五十万人を超える」

「実にふとどきな者たちですね」

「うむ。その教団を崩壊させてほしいのだ。方法は任せる。あと…」

「あと？」

王子が口元をゆがめ、にやりと笑う。

「教団のトップは大司教フランス、二十歳の男だ。それだけ教えておこう」

「それならたやすい話です。今日中に片付くでしょう」

「頼もしい限りだ。では頼んだぞ」

「はい」

私は教団の拠点がどこにあるか聞いた後、アランをカゴに入れて

城を出た。目指すは聖地アクエリウムだ。

ちなみに、歩いていくつもりはさらさらない。めんどくさいし。

「アラン、お願い」

「りょーかいにゃ」

その直後、私の背中に漆黒の翼が現れた。あれ、前は白かったのに。

「ねえ、なんで黒いの？」

「スカーレットの心がどす黒いからにゃ」

「あっそ、まあいいや。いこ」

私は翼を大きく広げ、空へと飛び上がった。城下街に建ち並ぶレングスの建物が、みるみるうちに小さくなっていく。

「行くよ、アラン！ もう誰も私を止められないよ！」

「にゃにゃっ」

「イケメンはお持ち帰り、不細工は半殺し。特大の逆ハーレムを作つてあげる！」

「おもしろそうだにゃあ」

私は聖地アクエリウムへと飛んだ。全身を絶大な魔力が駆け巡っ

ている。今なら神にでもなれそうだ。

「あははは、もう最高！　気持ちいい！」

聖地アクエリウム

私はしばらく飛び続け、聖地アクエリウムに到着した。

建物は一階建てばかりだ。日干しレンガを積み上げて造った物で、着色も装飾もされていない。

住民たちも地味で粗末な服装をしていて、街全体から質素な印象を受けた。

人通りは多く、結構な大都市に見える。でも、なんの魅力も感じない。

私を通りの真ん中に降り立つと、周囲の住民たちが注目した。くたびれた顔をした三十がらみの男性が話しかけてくる。

着ているのは茶色い一枚の布であつらえた服と、薄汚れた靴だけだ。

「お、お前さんは一体……天使かね、悪魔かね？」

私はにっこり微笑んで答えた。

「天使です。大司教フランス様に会いに参りました」

ごめんなさい、嘘ついて。でも、教団を潰すためには仕方ないんだよね。

男性は目を輝かせ、私に祈りを捧げた。他の住民たちも平伏して

祈っている。簡単に騙されちゃって、すごいお人よしだね。

彼がおずおずと口を開く。

「もしよろしければ、私が大聖堂へご案内致します」

「そうね、お願いしようかしら」

「どうぞ、こちらです。ついていらっしゃってください」

「ええ」

私が男性の後について歩くと、他の住民たちもぞろぞろとついてくる。うっとうしいけど、しばらくの我慢だ。

やがて、私たちは大聖堂にたどり着いた。

と言っても、やっぱり日干しレンガを積み上げただけの代物だ。違うのは三階建てっていう所だけ。

入口の両脇には槍を構えた衛兵がいたけど、男性が何やら告げると簡単に通してくれた。もう楽勝すぎて笑いそうになる。

私は、そのまま大司教の部屋まで案内された。

超大国の王族を敵に回していながら、この危機管理意識の乏しさは致命的だ。これは潰されても仕方ないね。

部屋に入ると、大司教が笑顔で迎えてくれた。茶色くて短い髪と茶色い瞳、白い肌。すっきりとした顔をした青年だ。

着ているのは、真っ白い一枚の布であつらえた服。装飾品の一つもない。

「ようこそお越しくださいました、天使様。サンタリア教団の大司教、フランシスと申します」

「スカーレット・フリーセアです。以後お見知り置きを」

彼は私に椅子を勧め、さらにお茶菓子をふるまった。お茶はやたら苦いし、菓子は固いパンを砕いて砂糖をまぶしただけの物。お世辞にもおいしいとは言えない。

「こんな物しかお出しする事ができず、誠に申し訳ございません」

「一向に構いません。でも、どうして……あなたは教団の指導者ですよね？」

欲望の魔女

フランススは、私の目をまっすぐに見つめながら言う。

「私たちは無欲を信条としております」

「どうしてですか？」

「ヴィクタリスは豊かな国でありながら、他国へ攻め込んで領土を奪い取ろうとしています。それは醜い征服欲による物です。私たちはそんな愚行を繰り返す王家に対し、自らの行いを通じて抗議をしているのです」

「そうですか、わかりました。清廉潔白な方なのですね」

そう言うのと、彼は身を乗り出して主張した。

「おわかりいただけるのですか、さすが天使様！　どうか私どもの先頭に立ち、この国をよい方向にお導きください……」

「お断りします」

フランススの表情が曇っていく。

「な、なぜ……」

私はにっこり微笑み、彼の瞳をのぞき込んだ。フランススは眉をひそめながら後ずさる。

「ス、スカーレット様……?」

「人間が生きていく上で、欲望はあって当然だと思います。あなたは女の子を抱きたくないのですか?」

「な、なんという事を……」

「私はイケメンに抱かれないし、愛されたいです」

彼の目尻がみるみるうちに吊り上がる。

「なんと破廉恥な……あなたがそんな方だとは思わなかった!」

「何を怒っていらっしゃるのですか。私は最初からそういう考え方ですよ」

フランシスが、顔をぶるぶる震わせながら扉を指さす。

「お引き取りください、今すぐに!」

「嫌です」

「なっ……」

私は彼の顔に右手をかざし、詠唱を始めた。

「高潔なる使徒は漆黒の海に溺れ、墮落した心は紫苑の泥濘の中へと消えゆく。汝、我が走狗となるべし!」

フランシスの周囲をピンク色の光が包んでいく。

超絶魔法エターナル・テンプテーション。これにかかった人間は、術が解けない限り私のとりこだ。

「う、うわあああっ!」

彼は悶え苦しみながら必死に目をそらそうとする。でも逃がさない。

私はその顔をつかみ、じっと見つめた。

「ほら、もっと私を見て。自分に正直になったらどうなの?」

「あ、悪魔め!」

「ふふっ……その悪魔に心を奪われそうになってるくせに。強がる事ないよ?」

悪魔と呼ばれて

フランススの目が、だんだん虚ろになっていく。術にかかったらしい。

「わ、私は……」

「私は何？」

「あなた様のしもべです……」

「ふふっ、あははは！ それでいい、それでいいのよ！」

もう笑いが止まらない。こうやって魔法をかけまくっていけば、どんなイケメンも私のとりこだ。

いずれアレックス王子にも魔法をかけて、私の前にひざまずかせてやる。

「フランスス、命令です」

「なんなりと」

「教団を解散させなさい。今後はヴィクタリスの方針に従うのです」

「かしこまりました」

彼は、街にある広場に信者たちを集めた。その人数はものすごく、とても数えられない。老若男女さまざまだけど、みんな粗末な服を

着ている点で共通してる。

フランススが石畳の地面に木の箱を置き、その上に立って呼びかけた。

「皆に伝えたい事がある。今日限りで教団は解散だ。これからはヴィクタリスに逆らう事なく、従順に生きていつてほしい」

信者たちは悲鳴を上げた。目を見開いて叫ぶ者、地団駄を踏む者、頭をかきむしる者……黙ってフランススの言葉を受け入れる人間など、一人もない。

やがて、その中から白髪で小柄の老人が進み出た。

彫りの深い顔をしていて、あごには白いひげを蓄えている。着ているのは深緑の服だ。

「フランスス様、なぜです。なぜ急にそのような事をおっしゃるのですか？」

「スカーレット様のご命令なのです。この方は地上に舞い降りた天使。その言葉を聞かないわけにはいきますまい」

老人は目を細めて私をにらみつけた。

「貴様が……貴様が教祖様をたぶらかしたのだな。この悪魔め、消え去るがいい！」

彼は両手を天に掲げた。そこに真っ白な光が集まり、球となって巨大化していく。

「天地を統べる神々よ、今こそ邪なる魂に裁きを！　ホーリー・エクスプロージョン！」

もう、めんどくさいおじいちゃんだね。

私は老人に向かって右手を振りかざした。その直後、彼の首に真っ黒なヒモが巻き付いてしめ上げる。

「ぐ……があああっ！」

老人は地面に倒れ込んでのたうち回っている。私はその前に瞬間移動し、彼を見下ろしながら微笑んだ。

「あなたに選択の余地はないのです。ご理解いただけましたか？」

任務成功

老人があまりに苦しむので、私はヒモを引っ込めた。

あくまでも、おどすのが目的だ。殺すつもりはない。

周りの信者たちは目を見開いて視線を集めている。誰も逆らおうとする人はいない。まあ、仮にいたところで叩き潰すだけだね。

私はフランススを押しのけて台に上がり、信者たちを見回しながら言った。

「皆さん、これ以上王家に対して反抗的な態度を取るなら、この私がゆるしません。命はないものとお考えください」

彼らは震えながらうなづく。ふふ、ちよいもんだね。

私はフランススをつれて王宮に帰り、アレックス王子と引き合わせた。

「ご苦労だったな、スカーレット。ところで、なぜこの男をつれてきたのだ？」

「下僕にしたいと思ひまして」

彼は目を見張った後、豪快に笑い出した。

「国家に盾突くほどの教団の指導者も、お前にかかつては下僕に成り下がってしまうのか。これは恐れ入った」

笑ってるのも今のうちだよ。いつかあなたも同じ目にあわせてあげるから。

本当はすぐにも魅了してあげたい所だけど、この王子ときたらキッチリ防御魔法で守られてる。それだけに今は手が出せない。

「スカーレット、今日はゆっくりと休め。湯浴みをして汗を流すなり、食事をするなり好きにすればいい」

「ありがとうございます」

私は浴室に行って湯浴みをする事にした。

紫水晶でできているのかと思ったら、予想に反して床も壁も大理石だ。

中は広々としている。一度に三十人くらい入れるだろう。ちなみに今は私の貸し切りだ。

侍女が「お体を洗わせていただきます」と申し出たけど断った。そのくらい自分でできる。

私は広々とした浴室の中でたった一人、椅子に座って頭を洗っていた。

村にいた頃は、川に行って体を洗ったものだ。

昼間行くと目立つし、夜は周りが暗くて怖すぎる。でも今はそんな心配をする必要もない。

ああ、幸せだ。王宮の生活バンザイ。そんな事を考えていると、浴室の外からフランススの声がした。

「スカーレット様、よろしければお背中をお流し致しましょうか？」

え、え……浴室に入るって事だね。私、裸なんですけど。

浴室にて1

私は反射的に答えた。

「け、結構です！ 自分で洗えますから！」

「そうおっしゃらず、ぜひ。あなたのお役に立ちたいのです」

そんな事言われても、すごく恥ずかしいし。

「あ、あの……他の事で役に立つてもらえれば……」

フランシスは無言だった。がっかりしながら立っている彼の姿が目に見えかぶ。

「……残念です、スカーレット様。お役に立てず申し訳ございません」

彼がしんみりと言ったのを聞いて、私はあせった。なんだか自分が悪いような気になってくる。

「あ、あの……背中だけなら……」

「本当ですか、ありがとうございます！ では失礼します！」

フランシスは白い布や、体を洗うための薬液を持って浴室に入ってきた。私は彼に背中を向け、両手で胸を隠しながら縮こまる。

「スカーレット様、本当にお美しい……」

「やめてください！」

私は思わず叫んだ。彼は魅惑の魔法をかけられているから、こんな事を言ったのだろう。そんな偽りの称賛なんかいらぬ。

「フランス。あなたは魔法にかかっているだけなんです。本当は私の事なんてちっとも……」

「いいえ、本心から申し上げているのです」

「だから、操られている自覚がないだけで……」

「そんな事はございません」

私はだんだんイライラしてきて、フランスにかかっている魔法を解いてしまった。彼は目を丸くして、無言で私を見つめている。

「ほら、わかったでしょ？ あなたは魔法で操られていたんです。それが切れてしまえば、私の事なんて別に……」

「いいえ」

「えっ？」

「やはり、あなたは美しいです」

端正な顔に笑みを浮かべている彼を見て、頭に血が上ってしまった。唇が震えるばかりで言葉が出てこない。

「では、お背中をお流ししますね」

彼は私の背中を優しく洗い始めた。もう恥ずかしくて恥ずかしくて、いてもたってもいられない。

「スカーレット様」

「……なんでしょうか」

「どうして、あなたはヴィクトリスのために働いていらっしゃるのですか？」

「ヴィクトリスのためなどではありません。この国もアレックス王子も、私にとっては単なる踏み台です」

彼はしばらく沈黙した後、おもむろにたずねた。

「その先にある目的はなんですか？」

「世の中の男性たちをことごとく私にひざまずかせ、好みのイケメンを集めて逆ハーレムを作る事です」

言っているうちに、なんだか死にたくなってきた。我ながら、どれだけ恥知らずで身の程をわきまえない人間なんだろう。

浴室にて2

フランシスが沈黙しているのを見て、私は震えながら言った。

「見下したいなら見下してください。今の私はそういう人間なんです。前は違ったけど……」

「見下すなんてとんでもない。ただ、教えてほしい事があります。以前のあなたはこういう方だったのですか？」

「それは……」

私は、彼に一つ一つ説明した。

かつては、小さな村に暮らす貧しい農民だった事。

魔法使いなのに、ろくな魔法を使えなかった事。

顔もスタイルも平凡だった事。

それなのに、王子様と結婚したいなんて思っていた事。

……結構なダメ人間だ。今も性格がダメだけど。

「そんな感じだったんです。笑えますよね」

「とんでもない。しかし、今のあなたからは想像もつきませんね」

「王子に変なワインを飲まされて、こうなりました」

「なるほど。おそらくそれは『欲望のワイン』と呼ばれる物ですね」

「欲望のワイン……」

「はい。それを飲んだ者はだんだんと理性を失い、欲望の塊になってしまうのです。王子は、あなたを操るためにそんな物を使ったのでしょうか」

「えっ」

「おそらく、今のスカーレット様は本来のあなたではないのです」

私は目を見開いて硬直した。今の状態が本来の自分かと思っていたのに、どうやら違うらしい。

フランシスが微笑みながら言う。

「今なら、まだ引き返せます。どうか元のあなたに戻ってください。私も微力ながらお手伝いを……」

「嫌です！」

私は、彼に背中を向けたまま叫んだ。

「もう貧乏な農民に戻りたくない。カビ臭い部屋に住みたくない。川で水浴びなんかしたくない！」

「スカーレット様……」

「出てって！　出てってよ！」

フランスはすごすごと浴室から出ていった。なんだか気の毒だけど、今はそれどころじゃない。

息を荒げながら体を洗った後、浴槽に入った。お湯から花の香りが漂ってくる。

「もう、引き返したくないよ……」

別に王子に操られていようが、本来の自分でなかろうが構わない。前の私に戻るのだけは絶対に嫌だ。

いずれ、超大国の王妃になれる。こんな魅力的な話があるだろうか。それに操られていると言っても、隙を見て王子を魅了してしまえば立場は逆転だ。

自然と口元に笑みが浮かんでくる。

悪魔と呼ばれようが構わない。進みたい道を進むだけだ。

私は浴槽の中で拳を握りしめた。

黒き悪魔

翌日、私の部屋にアレックス王子がやってきた。また何かたくらんでいるようだ。

「スカーレット、頼みがある」

「なんなりと」

「隣国リグリッドの軍隊が我が国に攻め込んだ。蹴散らしてきてほしい」

「全員殺せばよろしいのですか？」

「撃退するだけでもいいし、壊滅させてもいい。任せる」

「場所はどちらですか？」

「国境付近の街、アルビナスの東。兵数は三万、鉄の鎧を着て鉄の盾を持った重装歩兵だ。できるか？」

「たやすい事です」

王子はにっこり笑い、私を抱きしめて背中を叩いた。

「よく言った、さすがは未来の王妃だ。吉報を待っているぞ」

はいはい。私を操って、いい気になってるのも今のうちだからね。

「では行ってまいります」

「うむ、気をつけてな」

アランをカゴに入れて部屋を出た所で、アンジェリカと鉢合わせした。

相変わらず黒いカクテルドレスなんか着てる。うわ、嫌な奴に会っちゃったよ。

私は顔を引きつらせながらたずねた。

「何か？」

「あ、あの……スカーレット様……ですよね？」

「見ればわかるでしょう」

「いえ、あまりに変わられたので」

「そうですか。ご用件は？」

「突然申し訳ございません。折り入ってお話が」

この人、なんで急にへりくだってるんだろう。今までずっと上から目線だったのに。

とにかく、こんなのかまってる暇はない。

「急ぎますので失礼」

「そこをなんとか、お願いします。お時間は取らせませんから……」

ああ、うっとうしい。迷惑すぎる。

「わかりました。早くすませてください」

「ありがとうございます」

彼女は私の手を引いて近くの小部屋に入り、扉をそっと閉めた。
中には私たちの他、誰もいない。

「ご用件をどうぞ」

「あ、あの……」

アンジェリカは青白い顔をしながら、私を上目使いでチラチラ見ている。もしかしておびえてるのかな。

「スカーレット様……変わられましたね」

「どこが？」

「とても美しくなれました。それから……」

「それから？」

「……怖いです。見ていてゾッとします」

私はカチンときた。この女にだけは言われたくない。

「そんな事を言うためにわざわざ呼んだの？」

「も、申し訳ございません」

「今この場で、消し炭に変えてあげましょうか？」

「お……おゆるしてください！　どうか命だけは……」

彼女は涙目になりながらガタガタ震えている。そんなに怖いかな？

私は部屋の中にある鏡台の前に立った。映っているのは自分の姿だ。

「えっ……」

それを見て絶句した。また変身してしまったらしい。

流れるようなロングの黒髪、真紅の瞳、真っ白な肌。すらりとした体に、くびれた細い腰。

綺麗な事は綺麗だ。ただ、見る者を奈落の底に引きずり込むような雰囲気をもし出してる。一言で表現するなら、悪魔の化身。

「こ、これは……」

もう、性格がそのまま外見に現れてる。

アンジェリカがおずおずと口を開く。

「スカーレット様、このままではまずいです。私たちは悪逆非道な王子の手先となり、いずれは性格も外見も悪魔そのものに……」

いずれも何も、もうほとんどなってるし。

「いいじゃない、悪魔で。あなただって似たような物でしょ？」

「そうですが……最近、さすがにこれはまずいと思い始めまして……」

「私の知った事じゃないんだけど」

アンジェリカは哀願するような目で私を見ながら言う。

「あなたも私と同じ境遇でしょう。怖くないんですか？」

「別に。いいじゃない、あなたも前よりずっと綺麗になったよ。欲望のワインを飲んだでしょ？」

「ス、スカーレット様！ このままでは私たちは……」

「うるさい」

いい加減にウザい。もうがまんの限界だ。

「私はこのままでもいいし、あなたがどうなろうが知らない。さっさと消えてくれない？」

彼女が真っ青になりながら後ずさる。

「あ……あ」

「それとも、私が消してあげましょうか。ライバルは一人でも少ない方がいいしね」

「い、いやあああっ!」

アンジェリカは目を見開き、悲鳴を上げながら部屋を飛び出した。もう二度と来ないだろう。

さあ、敵軍を蹴散らしに行きましょうか。今の私に怖い物なんかないしね。

人を超えし者

私はアランをカゴに入れ、アルビナスの街へと飛んだ。たかが三万の兵士なんか敵じゃない。

街に着いてから東へ向かっていくと、リグリッドの重装歩兵団が見えた。

みんな鉄の兜をかぶり、鎧を着込んで盾を持っている。騎乗で指揮を執るのは十八歳くらいのイケメンだ。

彼は兜をかぶっておらず、金色の甲冑に身を包んでいる。

燃えるような赤い短髪と瞳、日に焼けた浅黒い肌、引きしまった顔。見た感じ、すごく男らしい。

彼は目を吊り上げて叫んでいる。

「ヴィクタリスの外道どもめ、今日こそ引導を渡してやる！」

さて、そろそろ止めましょうか。私は彼の前に舞い降りた。

「皆さん、ごきげんよう」

指揮官は曲刀を抜き放った。さらに、全身から殺気を放っている。こ、怖っ！

「……なんだお前は、人間か？」

「ええ」

「俺はリグリッドの第二王子、アルフレッド。お前は？」

「アレックス王子の部下、スカーレットです」

「そうか。ならば死ね！」

王子は馬を駆り、私に向かって突進してくる。女の子を殺そうなんて男の風上にも置けない奴だね。

私はにやりと笑い、アルフレッドの馬の上に瞬間移動した。目の前に彼の驚いた顔がある。

「う、わあああっ！」

「ごめんあそばせ」

私は相手のあごをつかみ、地面に叩き落とした。超絶魔法があれば、こんな事は実にたやすい。

「ぐああっ！」

地面に転がっている彼の前に降り、その顔を足で踏みつける。

「どうしました？ 王子様。私を殺すのではなかったのですか？」

「こ、この悪魔め……ぐうっ」

周囲の兵士たちが一斉に抜刀し、私を目がけて襲いかかってきた。

いちいち相手にするの面倒だし、まとめて片付けちゃおうね。

「天に広がる星々よ、その力の片鱗を我が前に示したまえ！」

私の長い髪が浮き上がり、上空に無数の白い球が集まってくる。

「スターダスト・ストーム！」

直後に白い光球が降り注ぎ、兵士たちを直撃して大爆発を起こした。彼らは悲鳴を上げながら逃げまどう。

「わ、わああああっ！」

「助け、助けてくれえ！」

「嫌だ、死にたくない！」

なんだか楽しくてたまらない。

「あははは、あっはははは！」

やがて、三万の兵士たちは散り散りになって逃げだした。残ったのはアルフレッドだけだ。

私は彼の頭をぐりぐりと踏みつけながら言う。

「残念ですね、王子様。あなたの完敗みたいですよ。ごめんなさいね」

「こ、この悪魔が……」

「そんな口を聞いていいんですか？ 殺しちゃいますよ？」

「殺したければ殺せ。貴様に屈するくらいなら、その方がマシだ！」

……かわいくないイケメンだね。とりあえず、お持ち帰りしておこうかな。

堂々たる帰還

私はアルフレッドを魔法で拘束し、ヴィクタリスの王城へとつれ帰った。

アレックス王子に捕虜を見せたところ、彼は手を叩いて喜んだ。さらに、私の肩をつかみながら言う。

「よくやった、スカーレット。さすがは未来の王妃だ」

「この程度、できて当然です」

「頼もしい限りだな。褒美は何がいい？」

「では、この男をください」

「わかった、好きにするがいい」

私はアルフレッドを自分の部屋につれ込み、椅子に座らせた。彼は眉をひそめてにらみつけてくる。

「何をする気だ。捕虜になったとは言え、俺は一国の王子なのだぞ。無礼な真似をしたら、ただではすまな……」

「知った事じゃありません」

私は微笑みながら黒い首輪を差し出す。

「……なんだ、これは？」

「つけてください。あなたは今日から私の犬です」

「ふ……ふざけるなあっ！」

椅子から立ち上がってつかみかかろうとする王子を、魔法で弾き飛ばして壁に叩きつけた。彼は目を見開いて崩れ落ちる。

「が、がはっ……」

「まだわかっていないようね」

「何を……」

私は王子の瞳をのぞき込んだ。彼は小刻みに震えている。

「あなたの命は、この私が握っているの。生かすも殺すも自由なんだよ」

「き、貴様！」

まだ抵抗するつもりなんだね。しょうがないなあ。

激昂する彼を空中に浮かび上がらせ、バシバシと床に叩きつける。

「ぐああ、ああああっ！」

「口の聞き方に気をつけなさい」

「ス、スカーレット……」

「え、何？」

「スカーレット様……お、おゆるしてください……」

あーあ、涙目になってるよ。かわいそう。

私にはやりと笑い、ようやく解放してあげた。

「ほら、自分が何なのか言ってみなさい」

「い、犬です……僕は、あなたの犬です……」

「あれ？ 犬が人間の言葉をしゃべるのはおかしいよね？」

はいつくばっている彼の背中にヒールの先を突き刺した。ああ、
なんかゾクゾクしてくる。

「ワンワン、ワオンッ……」

「え、何？ 聞こえない」

「ワンワン、ワンッ！」

「よかった、やっと自分の立場を理解してくれたね」

笑顔で抱き起こすと、彼は必死に私の頬をなめ回した。ふふ、もう完璧に犬そのものだね。

「あはは。くすぐったいよ、アルフレッド」

「ワンッ！」

「よしよし、いい子いい子。今後は私のペットとしてかわいがってあげるからね」

「ワンワンッ！」

やりたい放題1

アルフレッド王子をペットにした私は、次の目標を定める事にした。

そろそろアレックスをどうにかしたい。でも、彼は強力な防御魔法で守られている。それを解除しない事には、いくらなんでも厳しい。

そんなある日、絶好の機会が訪れた。アレックスが私を自分の部屋に呼んだのだ。

中には瀟洒な家具が並んでいて、奥にはダブルベッドがある。王子はグラスに入ったワインをすすめた。私はそれを舌で転がしつつ、彼の顔を見つめる。

王子が着ているのは金色に縁取られた赤い服と黒いズボン、茶色のブーツだ。それぞれに防御魔法がかけられていて邪魔くさい。

とにかく、それらをなんとかしないとね。

「アレックス様、本日のご用向きはなんでしょうか？」

「今日は部下として呼んだのではない。一人の女性としてお前を呼んだのだ」

きたきた、大チャンスだ。ここで超絶の餌食にしてあげよう。

私は目を細め、媚びた笑顔を作りながら甘い声で言う。

「ふふ……女として愛していただけるといふ事ですか？」

「その通りだ」

彼はベッドに座り、ワイングラスを揺らしている。

「隣に來い。明日の朝まで愛してやろう」

ふふっ、狙われてるとも知らずにいい気なもんだよ。

私は王子の前に歩いていき、その隣にゆっくりと座った。彼が私を抱き寄せてささやく。

「お前は最高の女だ……我が妻となるにふさわしい」

アレックスがキスをしようとした時、私は指でその唇を押しとどめた。彼は眉をひそめ、不満げに言う。

「なんだ、まさか拒むつもりか？」

「滅相もございません。ただ……」

「ただ？」

「私を信用してくださらないのがちょっと……」

アレックスは目を見開き、必死に主張する。

「何を言う、俺はお前を信用しているぞ。だからこそ妻として迎え

ようと……」

「いいえ」

私は視線をそらし、涙を浮かべながらうつむいた。王子は肩を抱いて体を揺さぶる。

「一体どうすればいいのだ！」

「服を全部お脱ぎになって、体にかかっている防御魔法も解いてください。そうしていただければ、私を信用していると判断致します」

「わ、わかった。待っていてくれ！」

アレックスは服を脱ぎ、さらに防御魔法も解除した。ああ、かわいそう。あなたはもう終わりだよ。

「スカーレット、ほら。これで……」

私は薄笑いを浮かべて右手を開いた。とたんに銀色の縄が現れ、王子を縛り上げる。

「な、なっ……」

ああ、助けを呼ばれちゃ困るよね。口もふさいでおこうかな。

続いて銀色の布が現れ、彼の顔に巻き付く。

「むぐっ、ふぐ……」

私はアレックスをベッドに押し倒した。すかさず馬乗りになり、その顔に右手をかざす。

「むぐっ……うぐううっ！」

アレックスは目をむき、体を震わせている。

ごめんね、こんな事しちゃって。あなたは私を信用してるのかもしれないけど、こっちはあなたなんか信用してないんだよ。

「ふふっ……いい眺め。さあ始めましょうか！」

「ぐうっ、ううーっ！」

私の右手がピンク色に光り輝く。

「汝を支配するは無上の快樂、その目に映るは永遠の樂園！」

アレックスは必死に身をよじり、大量の涙を流す。そんな事をしても私を喜ばせるだけでも知らずに。

さあ、仕上げといきましょうか。

「インフィニティー・テンプテーション！」

彼の体をピンク色の光が包み込んでいく。

超強力な魅惑の魔法だ。これにかかると術者の奴隷になってしまう。しかも、隷属する事が快樂になってしまうのだ。

私が解放すると、彼はゆっくりと立ち上がった。

「アレックス。気分はどう？」

「最高です」

「あなたにとって私は何？」

「妻……ではなく、ご主人様です」

「よろしい。今後は奴隷として私に仕えなさい」

「かしこまりました！」

やりたい放題2

それから一月後。

アレックスがヴィクタリスの国王となり、私はその妻になった。

ちなみに、先代の王を退位させたのは私だ。防御魔法をかけている宮廷魔術師を誘惑し、防御魔術を解かせた上で国王に超絶をかけて終わり。楽勝すぎる。

政権を握っているのはアレックスだけど、彼は私の操り人形だ。つまり、この国を動かせるのは私なんだよね。

とりあえず今の所、内政も外交も軍事も彼に任せてある。私はと言えば、イケメンの従者たちに囲まれてちやほやされる毎日だ。

さて、お腹が減ったから何か食べようかな。

自分の部屋の椅子に座ると、タキシードを着た従者たちが料理やお酒を運んでくる。彼らは、すっきり整った顔をしたイケメンばかりだ。

やがて目の前のテーブルに、山のような料理が並んだ。一人の従者が私の隣に座り、グラスに入ったお酒を勧める。

ふわっとした金髪に紫色の瞳、白い肌にしなやかな体。うつすらと花の香りも漂う。

ちなみにこの子はエミール。十六歳で、シャルダン伯爵の次男だ。

「スカーレット様、どうぞお召し上がりください」

「ありがとう」

お酒を呑んでいると、彼が私の顔を見つめた。

「本当にお美しい。まさに女神です」

「そんなお世辞はいらないよ」

「お世辞などではありません！」

エミールが私の手を握りながら言う。

「私はスカーレット様以上に美しい女性を知りません。もはや、この世のものとは思えない。あなたの美は人間のレベルを超えています」

魅惑の魔法をかけてないのに、ここまで言ってくれるのは嬉しい。

「本気で言ってるの？」

「もちろんです！」

「まさか人妻を口説くつもり？」

「人妻だろうが関係ありません！」

王妃と従者がこんなやり取りをしていたら普通は大問題だ。でも、

私にとってはどうって事はない。

その気になれば、王宮にいる人の口をことごとくふさぐ事ができる。って言うか、別に漏れたところで私に逆らえる人間はいないからどうでもいいね。

「スカーレット様、キスしてもよろしいでしょうか？」

「え、まさか唇に？」

「はい。どうかお願いします！」

彼は顔を真っ赤にしながら、私を見つめて言う。

すごい勇氣あるね、この子。王妃の唇にキスなんかしたら牢屋にほうり込まれても文句は言えないよ。

「そんなにしたいの？」

「はい！」

「じゃあいいよ」

「ありがとうございます！」

やりたい放題3

エミールは私を抱き寄せ、ついばむような軽いキスをした。さらにその後、濃厚なディープキスへと移っていく。

他のイケメンたちが口々に言う。

「一人だけずるいぞ！」

「よし、次は俺が……」

「黙れ、スカーレット様は私の物だ！」

ああ、すごい人気だね。ここまでモテたのは生まれて始めてだよ。

その時、部屋のドアをノックする音がした。エミールは私を解放し、あわてて引き下がる。

入ってきたのはアレックスだ。何か言いたげに私を見つめている。

「何よ、文句でもあるの？」

「……いえ。それより、ローゼンハイムについてなんですが」

「うん」

「俺は王族を皆殺しにしたつもりでしたが、彼らは生きていたらしいのです。宮廷魔術師の防御魔法で守られていたそうで……」

「ふーん、それで？」

「彼らをヴィクタリスに従わせたいのですが、いくら使者を送っても突き返されます。そこで……」

「まさか私に行けとでも？」

彼がびくびくしながらうなずく。私の機嫌を損ねるのがよっぽど怖いらしい。

「俺よりあなたの方が強いですし、あなたが行った方が彼らも快く従うかと……」

「わかったよ。行ってくる」

「兵士はお連れになりますか？」

「いないよ、邪魔なだけだし」

私はアランをカゴに入れ、それを持って城を出た。

以前はこの猫がいないと超絶を使えなかったけど、今は体中に魔力が満ちていて自由に使える。

だから、つれていく必要はない。でも置いていくと騒ぐので、外出する時はつれていく事になっている。

私は黒い翼を広げ、ローゼンハイムに向かって飛び立った。目指すは王城だ。

……と、その前にやる事があったよ。どうせあの国へ行くなら、前に住んでたボロ家を処分しとこう。あんなの黒歴史以外の何物でもないし。

私は自分の家へと方向転換した。

懐かしき我が家

やがて私は、以前に自分が住んでいたボロ家にたどり着いた。

傾きかけた木造の家で、部屋は二つしかない。壁の塗装はすっかりはげてしまっているし、屋根も穴だらけだ。

……よくこんな所に住んでたなあ、私。

まあいいや、さっさと吹っ飛ばしてしまおう。自分のみっともない過去と一緒に。

私は家に向かって手の平を向けた。とたんにすさまじい光が集まってくる。

その時、背後から男性の声があった。

「やめろ！」

幼なじみのロベルトだ。歳は十六。よく日に焼けた、たくましい体をしてる。

彼の後ろには、妹のシャロンも立っていた。歳は十四。茶色のストリートロング、茶色の瞳、ほっそりした白い顔と体をしてる。

私は目を見開いて叫んだ。

「ロベルト！ 久しぶり！」

「誰だよ、お前なんか知らないぞ」

え、まさかわからないわけ？

「私だよ、スカーレットだよ！ 忘れちゃったの？」

「スカーレットはそんな美人じゃない」

……喜んでいいのかな、悲しんでいいのかな。

「信じて、本人なんだよ。魔法で変わっちゃったけど。ほら、声は前と同じでしょ？」

「そう言えば……」

「ね？」

私が微笑むと、シャロンがおそろおそろ口を開いた。

「本当にスカーレットお姉ちゃんなの？」

「そうだよ。シャロン、元気になってよかったね」

「ありがとう。お姉ちゃん、すごく美人になったね」

「ふふ、ありがとう」

「……でも、なんか怖い。悪魔に見える」

「えっ？」

彼女がロベルトの後ろに隠れたのを見て、私は悲しくなった。前は「お姉ちゃん、お姉ちゃん」と言って慕ってくれたのに。

「シャロン、怖がらないで。あなたに危害を加えたりしないから……」

「信用できない」

ああ、打ちのめされた気分だ。ロベルトはこっちをにらんでるし、シャロンは隠れたまま出てこない。

「ひどいよ、二人とも。外見が変わっただけなのに」

「違うだろ」

「え？」

「お前がアレックス王子にさらわれたって聞いて、ずっと心配してたんだ。きつとひどい目にあわされてるんじゃないかって……ところが最近、信じられない話を聞いた。スカーレットがヴィクタリスの王妃になって、自分勝手な振る舞いをしてるってな」

「事実だよ」

「何かの間違いだろうと思ってたけど、今のお前を見て納得したよ。全身から漂うまがましい雰囲気が悪魔そのものだ。どう見ても以前のスカーレットじゃない」

ロベルトの想い

私はロベルトから目をそらした。後ろめたくて、とても正視できない。

「……なあ、スカーレット」

「何？」

「どうしてそんな風になっちゃったんだ？ どうしてだよ？」

いや、それは……欲望に負けたと言うかなんと言うか。

「お前はそんな奴じゃなかっただろ？」

「う……」

「村の人間が病気で寝込んだ時は、一晩中魔法で熱を下げ続けてくれた。暑さでバテて食欲がない村人を見た時は、魔法で食べ物の味を変えて食べさせてくれた。他にもいろいろと……」

そう言えば、そんな事もしてたね。今の私からはとても考えられないけど。

「スカーレットは村人思いの優しい魔法使いだったよ。魔力自体は弱かったけど。だから妹も慕ってたし、俺だって……」

え、俺だって？

「いや、なんでもない。それより何をしにここへ？ わざわざ自分の家を壊すためだけに来たのか？」

「ううん、それはついで」

「じゃあ本当の目的は？」

「この国の王を降伏させて、ヴィクタリスに従わせるために来たんだよ」

ロベルトは硬直した。シャロンは両手で口を押さえながら私を見つめる。

「ごめんね、ロベルト。シャロンも。やっぱり、変わったのは外見だけじゃないみたい。私、もう元に戻れな……」

「待てよ！」

彼が私の両肩をつかんで揺さぶる。

「このまま王城へ行ったら、本当に戻れなくなる。今ならまだ間に合う、思いとどまってくれ！」

「ごめん、無理」

「スカーレット！」

ロベルトは眉をひそめ、泣き出しそうな顔をして言う。

「いくら美人になっても、いくら高貴な身分になっても、人の心を

失ったら終わりなんだよ。頼むから、俺の話を聞いてくれ！」

言ってる事はわかるけど、聞くわけにはいかない。私は彼の手を振り払った。

「私を誰だと思ってるの？ ヴィクタリスの王妃だよ。あなたなんかが気軽に触れていい人間じゃないの。わかったら下がちなさい！」

ロベルトが両手で顔を覆い、その場に膝をつく。代わって口を開いたのがシャロンだ。

「スカーレットお姉ちゃん……」

「何？」

「そんな人だと思わなかったよ。大嫌い」

彼女の言葉は胸にぐさりと突き刺さった。実の妹みたいにかわいがってた子に、こんな事を言われると相当こたえる。

「……っ」

私はいたたまれなくなり、急いで空高く舞い上がった。もう彼らに会う事もないだろう。

ごめんね……馬鹿な私をゆるして。

セレスティアラ城

やがてローゼンハイムの王城、セレスティアラにたどり着いた。

セレスティアラは巨大な湖の真ん中にある。白鳥が浮かんでるみたいなので白鳥城とも呼ばれていて、とてもきれいだ。

真っ白な城壁が円形に城を取り囲み、その中に四つの尖塔がそびえ建つ。

庭へ飛び込もうとしたけど、見えない壁に阻まれてできない。

「ちょ……何これ？」

あせっている私にアランが言う。

「超強力な結界を張ってあるにゃ」

余計な事をしてくれる。どうせ宮廷魔術師のしわざだろう。

「なんとかならないの？」

「無理だにゃ。城自体が魔法陣になっていて、強力な防御魔法を發動してるにゃ」

なるほど、丸い外壁を魔法陣として利用してるわけだね。アレックス王子の一撃に耐えた理由がわかったよ。

仕方がないので門の前に降りた。金属の鎧を着込み槍を構えた兵

士が一人、私に視線を向けて叫ぶ。

「な、何者だ！」

「スカーレット・フリーセア。ヴィクタリスの王妃だよ」

「えっ……し、少々お待ちを」

彼はあわてふためきながら城の中へと入っていく。門の前で待っている、人魚の女王クリスティーナが湖から上がってきた。

見た目は、十七歳か十八歳くらい。ふわっとした内巻きカールの金髪、白い肌に赤い瞳、すっきりした顔と体。上半身は人間なのに、下半身はチェリーピンクの魚だ。

身に着けているのは白いビキニ、金のティアラと腕輪。とにかくスタイルが抜群で、セクシーさが半端ない。

彼女は目を細めて私を見つめた。

「私はクリスティーナ・ガーネット。人魚の国エリアスの女王です。あなたはどちら様ですか？」

私は一礼して言う。

「お久しぶりです、クリスティーナ様。ヴィクタリスの王妃、スカーレットです」

とたんに、彼女の顔が驚愕に歪んだ。

「え、嘘でしょう？ 顔も体型も違うし、黒い長髪と赤い瞳も……」

「私は変わったのです。もう以前のスカーレットではありません。あなたの国もヴィクタリスの傘下に入ってください」

「な、何を……」

「従えないとおっしゃるなら、実力を行使します」

クリスティーナはわなわなと震え、ゆっくりと声をしぼり出す。

「……あなたと言う人は！」

王子との再会

クリスティーナは目を見開き、右手を天にかざした。とたんに、その先が青く光り輝く。

「スカーレット様。エアスはヴィクタリスに組するつもりなどありません。お引き取りください」

弱いくせに、よく私に刃向かえるもんだね。ちよつと感心するよ。

「抵抗なさるおつもりですか？　よほど痛い目にあいたいようですね」

「う……」

クリスティーナが眉をひそめたのを見て、さらにたたみかける。

「やるなら手加減しませんよ。その美しい顔に傷がついても、恨まないでくださいね」

彼女は青白い顔をしながら硬直してる。

結局、自分が一番かわいいんだよね。あなたみたいな美人は特にさ。

「さあ、どうなさいますか？　ヴィクタリスに従うならよし、そうでないなら……」

クリスティーナが怯えきった表情を浮かべたその時、城の中から

二人の男性が出てきた。ミカエルとガブリエルだ。

私は、彼らを交互に見てから微笑んだ。

「お久しぶりです。スカーレットが帰ってまいりました」

ガブリエルは、私の用向きを知っているだろう。どういう反応をするか見物だ。

彼は無言で進み出ると、私を抱きしめて言った。

「よくぞ、よくぞご無事で……」

え、え？

「ずっと心配しておりました。あなたを守る事ができず、申しわけございませんでした」

え……この展開は一体。普通は怒るんじゃないの？

「ガブリエル様。私はこの国の民でありながら、裏切ってヴィクトリスについた人間ですよ。おわかりですか？」

「そうするしか道がなかったのでしょうか。あなたのせいではありません」

彼は私を抱きしめ、涙を流しながら言う。

「あなたを救い出すために手を尽くしたのですが、ヴィクトリスには通じませんでした。不甲斐ない私をどうかおゆるしください……」

そうか。そうだったんだ。

この人は、ずっと私の事を想ってくれてたんだ。私がヴィクタリスの王妃になった時も、傍若無人な振る舞いをしていた時も。

ありがた迷惑だよ。今や私は超大国の王妃。あなたなんか心配された所で全然……。

あれ。なんで涙が出るんだろう。全然悲しくなんかないのに、なんで……。

私は彼を強く抱きしめて言った。

「ご心配をおかけした上に、こんな形で戻ってきてしまいもうしわけありません」

「いいのです。無事であっただけで嬉しい。あなたは何も悪くありませんよ」

その時、アランが冷たい声で言った。

「スカーレット、茶番劇はいらないにや。さっさと王子を叩きのめして、ローゼンハイムを支配下に置くにや」

アランの本性

私はガブリエル王子から離れ、アランの前に座り込んだ。

「やっぱりダメだよ、こんな事。私、どうかしてみたい。ガブリエル様の態度を見て、ようやく目が覚め……」

「お前には失望した」

え、何言ってるのこの子。

「もう少しで完全な悪魔に変わったと言うのに、ここまで来て人の心を取り戻すとはな」

「ア、アラン……？」

「ゆくゆくは二人でこの世界を滅ぼそうと思っていたが、それも終わりだ」

黒猫が人の姿に変わっていく。

やがて、彼は男の子の姿になった。すごく背が高くてすらっとしてる。

銀髪で肌が白くて瞳が碧く、目が切れ長で鼻が高い。着ているのは漆黒のローブだ。

「あなた、何を……」

彼がにやりと笑い、空中へ飛び上がる。

「もう、お前に用はない。この世界と共に消え失せるがいい」

「なっ……!」

「我は悪魔アラン、この世に厄災をもたらす者。我を天界から地上に落とした神への復讐のため、彼が創ったこの世界を滅ぼしてやる」

彼の体を、どす黒い球が包み込んでいく。

「ふはは、ははははは! まとめてあの世へ逝くがいい!」

「させない!」

私も空へと飛び上がり、彼と対峙した。

「ほう、また姿が変わったな」

そう言われれば、黒いロングヘアがまばゆい金色に変わった。黒い翼も白くなっている。

「スカーレット、まるで天使の様だぞ。ますますもって気に入らないな」

「そんな事、どうだっていいよ。よくも私を利用してくれたね!」

「お前も我を利用しただろう。お互い様だ」

アランが私に向けて漆黒の球を放つ。

「ダークネス・カタストロフィ！」

それは私を直撃して大爆発を起こした。彼の高笑いが響き渡る。

「ははは、はーっははは！ 我に逆らった者の末路だ！」

やがて爆発が収まった。私は無傷でそこに浮いている。

「な……んだと？ 馬鹿な！」

「私は、あなたの力を得て強くなった。そんな物をぶつけられても効果はないよ」

「く、くそっ……こんなはずは……」

アランが右手を振り上げようとした時、その体に光の矢が降り注いだ。

「ぎゃあああっ！」

え、私は何もしてないのに。一体誰が？

下を見ると、たくさんの人々が集まっていた。公爵令嬢エリザベート、宮廷魔術師セレス、国王に王妃、近衛兵団。

あと……ロベルト兄妹。

その中で、ガブリエル王子が手を振っている。

「スカーレット様、皆で援護します！ 早く奴を！」

私は強くうなずき、アランに抱きついた。彼の顔が恐怖にゆがむ。

「貴様、何を……」

「天地を統べる神よ、数多の精霊よ！ 今こそ我に力を与えたまえ
！」

二人の体をまばゆい光が包み込んでいく。

「や、やめ……やめろ！ 正気か！ うわっ、うわあああーっ！」

決着、そして別れ

私はアランを抱きしめ、自分の全魔力を放出した。彼は目をむいて叫ぶ。

「や、やめ……やめろ……うわあ、ああああーっ！」

だんだんと視界がぼやけてくる。

「アラン、さようなら。あの世でまた会いましょう」

「ぎ、ぎゃあああああー！」

直後に大爆発が起こった。私は力を失い、湖へと落下していく。

皆さん、ごめんなさい。私が馬鹿でした。自分の欲望に流された結果がこれです。

もし生まれ変わったら、今度は世のため人のために尽くし……

そう思っていた時、私は意識を失った。

気がつくと、私はふわふわ浮かんでいた。

周囲は暗闇で、上には満天の星空が見える。下は海だ。

どうしてこんな所にいるんだろうと思っていたその時、目の前にアランが現れた。その体はまばゆい光を放ち、背中には天使の様な

翼がついている。

彼は私を見るなり頭を下げた。

「スカーレット、すまなかった。この通りだ」

「え……？」

「ゆるしてくれとは言わない。ゆるしてもらえとも思っていない。ただ、最後に謝っておきたかった」

「アラン……」

「命を張って皆を守ろうとした君を見て、私はようやく目が覚めた。もっとも、すでに遅かったが……」

私が沈黙していると、彼は手を握りしめて言った。

「せめてものお詫びに、最後の力を託そう」

「えっ……」

「君の人生に幸あれ」

彼はにっこりと微笑んだ。その姿がだんだんと透き通っていく。

「アラン、待って……待って！」

「さらばだ」

彼は消え去った。残されたのは私一人だ。

「こんな……こんなのもって……」

その時、周囲がまぶしい光に包まれた。もしかして私、帰れるのかな。

どうしよう。こんな馬鹿な事をした私を、みんなゆるしてくれないよね。

嫌だ、帰りたくないよ。このまま他の世界へ飛ばしてください。

フィナーレ

再び意識を取り戻すと、そこはベッドの中だった。

狭い部屋の中にたくさんの人がひしめき、私の顔をのぞき込んでいる。

真っ先に声を上げたのはロベルトだった。

「スカーレット！ よかった！」

私は羽根布団をかぶり、自分の体を隠した。みんなに合わせる顔なんかない。

今度はガブリエル王子の声が聞こえる。

「スカーレット様、どうか私にそのお顔を見せてください。お願いします」

私はしぶしぶ布団をめくった。顔は涙でぐしょぐしょだ。

「皆さん、ごめんなさい……本当に、本当に申しわけございませんでした……」

ガブリエルが微笑みながら言う。

「誰も怒っておりませんよ。ご無事で何よりです。どうかごゆっくりお休みになってください」

やがて王宮の人たちは立ち去り、ロベルト兄妹だけが残った。

「スカーレット、これからどうする気だ？」

「うん……まず、王妃の位を返上してくるよ。アレックス王子にかけた魅惑の魔法も解いてくる」

「その後は？」

「……考えてない。今の私に行く場所なんてないし」

「じゃあ、俺の家に来いよ」

「え？」

嬉しいお誘いだけど、私なんかが行ったら迷惑をかけそうだ。

「ロベルト、せっかくだけど……」

断ろうとしたその時、彼は私を強く抱きしめて言った。

「もう、何も心配はいらないよ。俺がついてる」

「ロベルト……」

「これからは俺が、お前を守ってみせる」

私は、心が満たされていくのを感じた。

ああ、ほしかったのはこれだったんだね。

いくら高い身分を得ても、魔法でイケメンを虜にしても、全然満たされなかった。私が本当にほしかったのは……誰かの愛だったんだ。

私はいつまでも、彼の胸の中で泣きじゃくっていた。

それから半月後。

私は、ロベルトと一緒に畑を耕していた。また元の農民に逆戻りだ。

ガブリエル王子に王宮へ来るよう誘われたけど、断った。申しわけなさすぎて、とても行く気にならない。

ロベルトが噴き出る汗をぬぐいながら言う。

「今日もあつついなあ。スカーレット、大丈夫か？」

「うん、平気……それよりごめんね」

「何が？」

「また、へっぽこ魔法使いに戻っちゃって。畑を耕す魔法でも使えれば便利なのに……」

彼が歯を見せて笑う。

「いいんだ。俺はそんなお前を好きになったんだから」

「ありがとう」

私が微笑んだその時、見慣れた二人の男性が歩いてくるのが見えた。え、嘘。なんで？

「スカーレット様！」

笑顔で手を振っているのがガブリエル王子、その横でむすっとしているのがアレックス国王だ。

「な……なぜここに……私に何か？」

あわてふためいている私に、ガブリエルが言う。

「アレックス様がどうしてもお会いしたいとおっしゃるので、こうしておつれしたのです」

え、ええ……つれて来なくていいのに。

アレックスがそっぽを向きながら口を開く。

「スカーレット、俺と復縁してくれ」

ちょ、待ってよ。今さらそんな事を言われても。

「俺は他国への侵略をやめた。これからは平和な国を造っていくつもりだ。お前もきつと気に入るだろう。だから戻ってきてほしい」

こ、困るよ。気持ちは嬉しいけど。

その時、ロベルトが進み出て怒鳴った。

「おい、スカーレットは俺の彼女なんだ。国王だかなんだか知らないけど手を出すな！」

「なんだと！ お前か、俺から王妃を奪ったのは。ゆるせん、決闘だ！」

ヤバイヤバイ、誰か止めて。そうだ、ガブリエルがいた。

「ガブリエル様、二人を止め……」

「スカーレット様の争奪戦ですか。これは私も参加せざるを得ませんね」

ちょ、ちよっとー！

平穏な日々が訪れるかと思ってたけど甘かったらしい。

私の人生は、これから一層波乱に満ちた物になりそうだ。

『王子様と結婚していいですか？ 完』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2166t/>

王子様と結婚してもいいですか？

2011年8月2日23時30分発行